
Blue point

神木 流華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue point

【Nコード】

N2527Y

【作者名】

神木 流華

【あらすじ】

異世界転移モノ。男が受けた仕事、それは一つの箱を運ぶだけの簡単なもののはずだった。しかし、幾人もの思惑が思わぬ事態を引き起こす。

仕事中に異世界に召喚されてしまった男の物語。召喚された状況が特殊で訳の分からない体となりますが、強く、身勝手に生きていきます。基本一言多い連中が紡ぐ異世界譚。※主人公はハイスペックでそれなりの力を有しますが、基本強くはありません。後、必要のない無駄な会話が多めです。気楽に読んでいただければ幸いです。

プロローグ (前書き)

何となく書き始めてみました。拙い文章ですがよろしく願ひします。

誤字、脱字、その他おかしいところがあればご指摘いただけると嬉しいです。

プロローグ

都心からそれ程離れていない場所にある廃ビル、元々は幾つもの企業がオフィスとして使っていたが、その頃の賑わいは微塵も感じられない。撤去するべきデスクやパソコンといった備品は現在もほぼそのまま残っており、今も尚そこはオフィスとしての体裁を保っている。著しくは業務用の大型機器も放置されている始末だ。

今夏には取り壊される予定であったその廃ビルは、不況の煽りによって幾つかの関連企業が倒産、業績悪化することによって放置される結果となった。11月に入った今でも今後の目処は立たっていない。持ち主にとっても、地域住民にとっても邪魔でしかない置物だ。そんな誰も立ち入ることの無くなったビルのロビー、三階まで吹き抜けになっているその場所に一人の男が足を踏み入れていた。男というぐらいであるから、その風貌は子供ではない。探検であったり、秘密基地を作りに来たという類いの理由で訪れた子供であれば可愛いものであるが、その男はとうに成長期を過ぎた男性であった。

男は膝まである浅黒いコートを羽織り、大きめのトランクケースを片手で軽々と持ちながら煙草を吹かしていた。時刻は既に深夜0時を過ぎた辺りである、廃ビルに赴くような時間ではない。更に言うならまともな人間が来るような場所ですらない。

既に大分短くなっていた煙草を投げ捨て靴底でこするように火を消すと、そのまま奥の階段へと向かい黙々と上層に昇っていく。廃ビルの階層は9階まであり、そこそ高ビルである。オフィスとして使われていた内部はは不必要に天井が高く開けた印象だ。階段で上がるにはそれなりに労を要するだろう。普段、何気なく使っているエレベーターの有難味を再認識出来る程度には疲れるはずだ。

そんな長い階段を男性は無言でひたすらに登っていく。電力会社からの電気は既に供給されていないためエレベーターを使う訳にもいかない。仕方がない。もつとも、こんな時間であれば通常の会社でもエレベーターなど動いていないだろうが。

男は7階までたどり着くと階段を登るのを止めた。決して疲れた訳ではない。最初から7階に目的地があった。男は迷うことなく進んでいく。行き着いたのは一つの部屋。小会議室といった様子のその部屋には、破棄されてまま置いて行かれたであろう折りたたみ式の机と座椅子が乱雑に押し込められていた。

手にしたトランクケースを机の上ののせて慣れた手つきでダイヤルロックを解除していく。置かれたトランクケースは軽々と持ち運ばれていたのに反して机が軋むほどの重量があったらしい。嫌な音を立てて机が撓む。しかし、そのまま壊れてしまうようなことはなく一応として机の役目は果たされている。壊れたところで所詮処分するべきもので問題はないだろうが、それと共にケースの中身が飛び出てはたまったものではない。

男は中身をいくつか取り出し別の机へと移した。取り出されたものは三つ。一つは黒光りする鉄の塊、もう一つは継ぎ目のない10cm程の箱、最後に携帯電話。この国では一般人が普通所有することができない鉄の塊、一丁の拳銃を手にと状態を確かめ懷に忍ばせる。更に机に置いた携帯電話を手にして窓の近づいていく。

深夜0時を回ったというのに外はまだ明るい。その光に照らされ今まで伺うことのできなかった男の顔が段々と浮き彫りになる。照らし出された顔は日本人というには少し彫りが深くずいぶんとしつかりとした造形だ。年齢は20代後半に入った辺りだろうか。切れ長

の目はどこか冷たい雰囲気をかもちだしているが、くつきりした二重まぶたによりその印象は幾らか和らいでいる。剃るのを忘れたのか、それともファッションなのだろうか無精髭が目立つ。髪は黒く耳の位置よりも長い、男性としては大分長い部類に入るだろう。十分に結わえることができる程度の長さ。髭と違いしっかりと手入れされているのか実に触り心地のよさそうな滑らかなストレートだ。

男は窓の側まで来ると、鍵が空いていることを確かめてから開けよう手を伸ばす。が、開かない。長らく放置されていたためか錆び付いており片手ではとても開けられない。バツの悪い顔をしながら携帯電話を一度コートのポケットへと滑り込ませる。そして両手で力任せに窓を開け放とうとするが、また開かない。

よくよく見れば窓は溶接されているようだ。ビルの7階、道路に面した窓が開かないようになってるのはそれ程不思議なことでもない。男は恥ずかしそうに辺を確かめ、周りに誰もいないことを再確認する。もともと誰も居るはずがないのだが、見た目に反して意外に可愛い所がある。

窓が溶接されていたのは一方のみで、もう片方は驚くほど簡単に開いた。11月の夜、窓を開ければ当然冷たい外気が侵入してくる。流れ込んで来る湿った空気は撫でるように男性の頬を過ぎ去っていく。その冷たさはここまで登ってくるのに火照った体を良い具合に冷ます。長い間締め切られ、埃ばかった部屋の換気にも丁度良い。

男は少しの間、心地よい冷たさを味わうと先程コートにしまった携帯電話を取り出した。暗がりでは判別できなかった携帯電話も明かりを受けてその見た目が顕になる。ナイトブルーのストレート型、一世代前の型だ。最新の機種は機能的ではあるが、男にとっては些か耐久度に問題があったため機種変更をためらっている。

つながるのは履歴の一番上にある番号。すると相手は1コールもしない内に対応した、まるで電話がかかってくるのが判っていたように。

『お待ちしていました。時間通りです』

電話口から聞こえたくるのは口調こそ女性のように丁寧なものであるが、明らかな合成音。男にとっては良くも悪くも聞きなじんだ声だ。この合成音の主との付き合いも既に5年になる。

「指定のポイントに到着した。まあ、言わなくても分かるか」

男は電話先の相手の支持でこんな時間に廃ビルに来る羽目になっていた。

『はい、視認しています』

「…いつも何処から見てるんだ？」

電話先の相手、仮に仲介屋としておこう。既に述べたが、男性とこの仲介屋とが知り合って5年の歳月が経過している。だというのに男は一度として仲介屋の姿を見たことはない。しかし仲介屋は何時も何処かで男性のことを見ている、らしい。男も当初は探し出してやろうと躍起になったこともあったが、既に諦めていた。今ではタチの悪いストーカー程度にしか考えていない。

出会いは差出人不明の一通のメール、嫌に手の込んだそのメールは発信元を特定できないように複数のサーバーを経由して男の元に届けられた。示された文章は「仕事を依頼したい」という一言。加えて男のハプニング画像集。報酬も良かったためそれ以来仕事を請け負う間柄となっている。

仕事の内容は合法的なモノから非合法的なモノまで多種多様。人の命を救うこともあれば、無意味な殺害を繰り返すようなこともあった。

そう、男は世間一般にいう殺し屋であった。

『何処からでも、何時も貴方を見えています』

帰ってきたのは答えになっていない答え。答える気など端からない。聞き方によってはロマンチックなものに聞こえなくもないが、単調な合成音で発せられるそれは軽いホラーである。

「…そのまま遠いところで永遠に見守っていてくれ」

『言われずとも』

合成音だというのに間髪いれずに帰ってくる返答に男は軽く寒気を感じる。こんな会話をしながらも辺りを警戒していたのだが人の気配は一切ない。職業柄、気配には人一倍敏感である男にとっては視られていること自体嘘ではないかとも思えた。しかし、以前上着裏返しに着ていた時や、靴下を左右で履き違えた時に注意されたり、蹴躓いた時にリアルタイムで笑われたことがあったので信じるしかない。

『ちなみに左の窓は溶接されていて開きません』

「……………」

やはり視られていたかとバツの悪い顔をして黙り込む。

『可愛いミスは仕事外でお願いします』

「うるさい、早く次の支持をよこせ」

男は口調こそ怒っているものの、そこに敵意や害意といったものはない。仲の良い友人同士でじゃれ合っている感覚だ。これほどに歪な友人関係というのも珍しいが、二人にとっては日常になりつつある。

『今回は箱をその部屋に置いていただければそれで完了です』

箱というのは男がトランクケースから取り出した継ぎ目のない立方体のことだ。

「それだけか？直接の受け渡しは？」

『必要ありません』

今回の仕事は荷運び、物さえ気にしなければそれ程危ない仕事ではない。物さえ気にしなければ：

「で、置いておくだけの仕事になんで拳銃が支給される」

『護身用です』

「銃刀法なめんな」

懷に忍ばせた拳銃に手を伸ばし、その存在を確かめる。

『必要になるかと思ひまして』

「要するにそういう仕事か、もう少しマシな装備は用意できなかったのか」

『この国ではそれが限界です。自前のものも持っているのでしょう』

そう言われて男は机の上のトランクケースに視線を落とす。

「出来れば使いたくないんだが」

『予定通りなら交戦はありません』

「予定通り行ったこと、あったか？」

男は口元に笑を浮かべながらそう言うと、窓から離れトランクケースへと近づいていく。開いたままであったそれを静かに閉じ、ダイヤルロックを適当に回し鍵をかけた。

『…今までのデータからだとい〇〇回に一回は予定通りに進んでいきます』

「意外に多いなっ…！」

男は言い終わらないうちに悪寒を感じとつさに横に飛ぶ。

瞬間、左肩に激しい痛みが走った。

「早速、予定通り予定が崩れたな」

壁際にもたれかかるように身を隠す男。携帯電話を頬と右肩に挟み右腕を開けると、痛みを感じた左肩を押さえ状態を確かめる。

（…だいぶ、挟まれたか）

動かすことはできるが出血が多い。

狙撃、おそらくは向かいにあるビルのいずれかから、仕組まれていた依頼だったのかと思案する。

『それを予定通りとは言いません』

そんな非常事態に聞こえてきたのは、心配の声でも、状況説明を求める声でもなく、平坦な合成音による突っ込みであった。

「他に言うことは無いのか？」

『狙撃位置は北東のビル屋上です。そのまま壁伝いに脱出してください。箱は可能なら回収を』

「…了解」

男は傷の状態も聞こうしない仲介屋に対して釈然としない気持ちを抱きながらも、的確な指示に従い歩を進める。

幸い、箱とトランクケースは狙撃手から死角となる位置にあったため回収することができた。箱に関しては罠である可能性が高いが、奪うことが目的である可能性も否定できない。回収は当然の流れであろう。

「荷は回収した。安全を確保しつつ次の支持を待つ」

『了解。いつも通りの対応をお願いします』

そのまま通話を切って携帯電話をコートのポケットに滑り込ませる。いつも通りの対応というのは自己判断で最善を尽くすというものだ。要するに死なない程度に頑張れ、である。

脱出しようと警戒しつつ扉に近づくが位置が悪かった。対面の壁に隣接する形で設置された扉は狙撃位置から丸見えだ。狙っていない訳がない。

（さて、どうするか…）

このままトランクケースを盾にでもして突破するかと考えていると、

男は僅かに違和感を感じる。人の気配だ。

（：数は三、いずれも訓練され武装済み。包囲されたか）

常人では気付かないような僅かな気配から男性は状況を判断する。ほんの少しの足音から人数や訓練の有無を、衣ずれの音や擦れ合う金具の音から装備の有無を嗅ぎ分ける。

（使わせて貰うか）

男はトランクケースの影に隠れるようにして壁際に屈み込んだ。肩の傷が痛むが今は忘れ息を整える。数秒の膠着、男に動きがないと判断すれば外の敵はそのまま制圧にくる。

案の定扉が蹴破られ、部屋の中に何かが投げ込まれた。手榴弾、否、爆発はせずガスが噴射される。催涙弾だ。瞬く間に部屋はガスに包まれた。

男はそれにほんの少し胸をなでおろす。殺すだけが目的なら催涙弾は使わない。飽くまでも制圧、この部屋に傷つけない何かがあるということだ。即ち、今回の荷が目的ということ。

煙の中、ガスマスクを付け武装した人影が銃を構え部屋に侵入してくる。その瞬間、迫り来るトランクケース、予想していなかった抵抗に人影が僅かにたじろいだ。しかし、そこはプロ、咄嗟に持ち直し冷静にケースに向けて発泡、直ぐ様合図をして一步後退。しかし、それは更に思わぬ方向からの干渉で阻まれる。

ガスの煙の中から現れた一本の腕が銃を持った手を掴む、男のものだ。男はキャスターのついたトランクケースを滑らすと共に身を屈

め煙の中を並走、侵入者の死角に回り込んだ。そもそもガスマスクなどは無駄に視界を狭めてしまう。煙の中、分かりやすい標的を与えてしまえば気をそらすのは容易い。

男は目を瞑っている。息も止めている。そんな状態でも男には十分だった。

掴んだ腕を捻り、銃口を侵入者に向けて優しく引き金を引いてやる。ボディーマーを着込んでいるようで致命傷にはならないが、意識は刈り取れたらしい。侵入者の重心がずれる。

倒れ込む前に扉の方へ押しその影に添うようにして扉の外へ、同時にこちらまで滑ってきたトランクケースを左腕で受け止める。

予想していた位置に残りの二人、一人は扉の直ぐ横だ。転がるようにして出た勢いを殺さずに左腕でもったトランクケースを遠心力を加えてフルスイング。左肩が悲鳴を上げるが気にしない。命と腕一本なら前者を選ぶ。扉の横にいた二人目の侵入者はコンクリートの壁とトランクケースに挟まれ、何も解らないまま絶命した。

そこに狙撃手の第二射、その弾道は正確に男に向かって突き進む。しかし、男はそれも予想済み。トランクケースから手を離し、膝を付いて倒れかかった一人目の侵入者と床の間に滑り込む。そうして第二射は肉の壁に阻まれ、一人目の侵入者が絶命した。

空いていた男の右腕には何時の間にか拳銃が握られている。仲介屋から渡された一丁の銃。その銃口は狙撃手の第二射が届くよりも先に三人目の侵入者へと向いていた。第二射が着弾するとはほぼ同時に発砲、三人目も何もできないまま倒れ込む。

男はそこで止まらない。三人目はまだ生きている。直ぐ接近づき、どこからともなくナイフを取り出し、三人目の首筋に突き立てる。続け様に三人目の持っていた銃を奪い、ガスマスク越しに数発発砲、三人目の侵入者が絶命した。

「…妙だな」

無事に危機を脱した男であったが、引っかかりを感じていた。それは狙撃手の第一射から侵入者が来るまでのタイムラグ、連携が取れていない。むしろ不足の事態に慌てて突入してきた感がある。

（こいつらと狙撃手は別口か…それに）

男は軽く辺を一瞥すると殺した相手の装備を剥ぎ取っていく、予備弾倉に手投げ弾類、ついでに金目のものも頂戴する。その様は余りにも無防備だ。

ガチャ

そんな追い剥ぎに夢中になっている男の背後で聞きなれた嫌な金属音が響く。

男の後頭部に突きつけられる拳銃、しかし、男は全くと言って慌てる様子はない。

そこには漆黒のライダースーツを身に纏ったブロンドの女性。男はその姿を確認することもなく口を開く。

「やっと出てきたか、久しぶりだな」

男はさして気にする様子もなく物色を続ける。そんな男にブロンド

の女性は無表情のままに語りかける。もちろん銃は下ろさない。

「久しぶりね。そして相変わらず巫山戯た人」

言動からも男が気づいていたことが伺える。それで銃を突きつけられるのを待っているのだから巫山戯ていると言われても仕方がない。

「殺るならさっき殺ってただろ？」

男は先程の交戦の中、女性の気配に気づいていた。更に彼女の腕なら十分に殺せる余裕があったこと、そして彼女に男を殺すだけの理由があることも知っていた。

「お驚かないのね。私が生きてること」

「別に珍しいことでもないだろ。死んだと思っていた人間が生きていることなんてよく聞く話だ」

実際に体験するのは初めてだがな、と付け加えて男は笑を浮かべる。

「あら、私は結構あるわよ」

「俺はお前と違ってちゃんと確認するからな」

気安く語り合う二人、そんな間も肩から血は流れているし、銃口も向けられたままだ。

「それじゃあ私の亡骸も確認してくれたのかしら」

「そのつもりではあった」

「私の死体、綺麗だった？あまり無様な様は晒したくなかったのだけれど」

「安心しろ、とても視られたものじゃなかったからな、視たところ

で誰もお前だとは気づかんさ」

そういう考えもあるわねと、ここにきて女性も親しげな満面の笑みを浮かべる。もったも、この状態で笑われても逆に恐ろしいのだが。

「多分綺麗には殺せないと思うけど、我慢してくれるかな」

「今度は綺麗に殺してやるよ。ちゃんと見分けがつくようにな」

男が言い終わると同時に女は引き金を引いた。

しかし、弾丸は射出されることなく音だけが響く。空砲だ。それがまるで徒競走のスタートを告げる合図のように鳴り響いく。その音と共に男は近くの部屋へちと飛び込んだ。そこに女性の声が響く。

「これで貸し借りは無し、次は無いわよ」

ビル内の部屋は壁に面して設置されている小部屋と中央に位置する大部屋とに分かれる。男が狙撃にあったのは小部屋で、今飛び込んだのは大部屋にあたる。大部屋自体は多くのガラス戸が付いているので廊下側から内部を確認することは容易であるが、全く明かりのない暗がりに加え撤去されずに残っていた備品によって隠れるには事欠かない状態であった。身を屈め机の影に隠れながら男は考える。

（今のは不味かったな。律儀な奴で助かった）

この二人の間にどんな過去があったのかは伺い知ることはいできない。しかし、女にとっては今の空砲は必要なものだったのだろう。そうでなければ男は既に死んでいた。

「まいったな」

男は思わず弱気な一言を呟いていた。無理に動いたせいで肩の傷口が開きコートの肘にはたつぷりと血液が溜まっている。既に感覚も無い。

そんな時に僅かな振動音、携帯電話のバイブレーションだ。男は今から命のやりとりをしようとしているというのに気にせず携帯に手を伸ばす。

「悪い、電話だ！ちよっと待て」

そして、大声で女に待つように告げる。本当に巫山戯た奴だ。そんな男の性格を知っているのだろう。女はため息交じりに了承する。

「もしもし、現在絶賛修羅場真最中です。どうぞー」

『元氣そうで何よりです』

聞こえてきたのは平坦な合成音。相手は確認するまでもなく仲介屋であった。

「いや、結構不味いな。ん？もしかして見てないのか？」

『残念ながらこちらも手一杯でして』

「久しぶりに開放された気がするな」

常に監視されていた気をする男にとっては嬉しいことだ。しかし、それは同時に異常事態であることも示していた。

『しくじりました。私は間も無く逝きます。最後に話せて良かった』
「…そうか、残念だな」

『そう言ってもらえると嬉しいです。それと狙撃手以外は排除しました』

「手間をとらせたな」

どうやってとは聞かない。男はその言葉を盲目的に信じることにした。5年間連れ添った相棒が言うのなら間違えないのだろう。

『…最後に一つ、質問してもいいですか』

一拍置かれたその言葉には、何時もと変わらない合成音だというのに何処か躊躇いが感じられた。

「ああ、構わない」

男がそう答えるも一向に質問は来ない。男がしびれを切らせて口を開こうとしたとき、

『…ほん：と、もたない：から、直接：はな：す…』

次に聞こえてきたのはか細い女性の声、今にも途切れそうな仲介屋の肉声であった。男は黙って聞き入る。おそらくは最後である会話を聞き漏らさないように。

『あなた：名前：は……………』

そこまで言って、その続きは終ぞ聞こえてくることはなかった。しかし、男はその質問に誠意をもって答える。

「」

とても聞き取れないような小声で、しかし、はっきりとした口調で、男は自らの名を口にした。十数年ぶりに言葉にする自らの名前はどこか他人のモノのようで、男は自分に名前など存在しないことを実感していた。そしてこれが男が自らの名を口にする最後の出来事となった。

「生き残れたら墓ぐらいは作ってやるよ」

既に物言わぬ塊となった携帯電話に向かってそう呟き、惜しみながらも通話を切る。自分が思っていたよりも遥かに仲介屋に依存していたらしい。まるで自らの半身を失ったかのような喪失感。仲介屋が女性であったことも少なからずショックを増していた。

そしていつものように携帯電話をコートのポケットに滑り込ませ徐に立ち上がる。

「もういいのかしら」

呆れ顔の女。すっかりとペースを乱されたようだ。

「用事もできたからな、さっさと終わらせよう」

これは既に負け戦であった。左腕は使い物にならず、血もかなりの量を失っている。銃こそ持っているが十分な装備とは云い難い。ついでに今の状態でまともに銃撃戦を行う自信は男にはない。時間が経てば更に不利になる。

(∴こういうキャラではないんだが)

男は意外にも特攻した。その速さはとても重傷をおった体とは思え

ない俊敏さだ。発砲しようとする女に対して机の上に置き去りにされていたファイルケースを掴み取り勢いに任せて投げつける。辺に舞い散る書類の束、ほんの一瞬、女の動作が遅れる。僅かに照準が乱れ発射される銃弾、それらは確かに男に命中した。しかし仕留めるにはいたらない。

男は使えないと判断した左腕を盾にして顔を守りながら疾走していた。銃弾は盾にした左腕に2発、左鎖骨に1発命中する。銃弾は着ていたボディアーマーと防弾コートにより貫通を免れていたが、骨が軋むような衝撃に見舞われる。今ので左腕は折れただろう。それでも男は駆け抜ける。

「欲しいのはコレだろ？」

男は懷から10cm程度の立方体を取り出し女に向かって全力投球。

「なっ！」

女は避けることもできず体で受け止める。否、避けることはできたが、その行動は選択できなかった。その箱が何なのか知っている女にとってはそのまま見過ごすことなどできなかった。

「これがなんだか知って！」

「知らないね！」

女の懷と言っている位置まで潜り込んだ男は気持ちいいくらいはつきりと告げる。

そして右手には何時の間にか小振りのナイフが握られていた。盾として用いていた左腕はもはやまともに動かすことも叶わぬ状態であ

るが女の銃を下から押し上げる事程度はこなせた。女の右腕には箱。銀光一閃、鈍く銀色に光る刀身は女の無防備になった腹部に突き刺さる。そのまま手首を捻り、女の腸を抉るように掻き回す、更にそのまま横薙ぎに切り開きナイフを振り払う。致命傷だ。

血を帯びて赤黒く輝く刀身、その軌跡を追う様にして美しい弧を描き鮮血が舞う。妖艶な唇からは内蔵より逆流した血液と胃液の混合液が流れ出す。しかし、その口元には笑が零れていた。

パンツ

女は押し上げられた腕から、銃口のみを無理やり斜め下に向けて発砲、無理な体制で引金を引いたことにより反動で手から拳銃がこぼれ落ちる。しかし、その代償に銃弾は男の右大腿部を貫いた。

足に力が入らずにガクンと男の体制が一段下がる、が気力のみで体を支え踏み留まる。しかし本格的に体の自由が効かない。そんな状態の男の顔に女の左腕が伸びる。

女も必死だ。掴むなどという生易しいものではない。爪を突き立て肌に食い込んでいる。目元の位置に添えた親指はためらうことなく男の右目をグシャツという音とともに潰しきった。

「ぐあ」

嫌な音が頭に響く。ここまでどのような激痛を受けてきても、声一つ上げようとしなかった男の口から苦言が紡がれた。痛みの容量が精神力では押さえきれなくなったのだろう。そのまま踏み留まっていた体も崩れ落ちる。そこに容赦のない蹴り、女の細いつま先は男

の鳩尾に深く食い込んだ。

「がっ！」

今度は男が吐血する番であった。地を這いながら血を吐く様は余りにも凄惨で目覆いたくなる光景だ。

「…ぶっ、これじゃ、私も助からないかな…」

女は血を吐きながらも何故か笑っていた。余裕は無い。抉り切り開かれた腹はどう見ても死に直結するレベルの傷だ。

女は男の腹に靴底を擦り付ける。もはや男に言葉を返すだけの余力はない。ただ、細い視線を向けることしかできないでいた。

「でも…目的は、果たせそう…」

そう言って腹の上に靴底を力強く叩きつける。人間ポンプよろしく、男の口から噴水の様に勢い良く血飛沫が噴射した。足はそのままに屈み込んで先ほど落とした拳銃を手取る。

「…約束は綺麗に殺さないようにする…だったかしら。こっちも、ゆっくり縋って殺したいんだけど…それなりに…余裕は…のよ。残念だけ…殺すわね…」

そう言う女は男に向け引き金をひいた。

「さようなら、ディー」

呼びかけたのは男の愛称だろうか、これで男は死ぬずだった。

確かに脳から発信された引き金を引くという命令に従い筋肉が収縮し、左手人差し指が動くのを感じ取っていた。しかし、感触がない。今しがた持っていたはずの拳銃の重みがない。

女は自身の目を疑った。ゆっくりと重力に従い落下して行く拳銃。離した訳ではない。手の形は拳銃を握ったままだ。そこに存在していれば。

女の左腕、手首から先がまるで輪切りにされたかのように綺麗に無くなっている。痛みもなく出血もない。消え去ってしまった、左手首のみ神かくしにあったかのように。

「…何よ、…これ」

無くなった手首の断面をまじまじと見つめる女。さすがに困惑の色を隠せない。しかし、消えたのは手首に限らなかった。いや、それはまだ途中であり、進行中の現象であった。手首から侵食していくようにゆっくつりと、腕、肘、二の腕と順に消えていく。

「いやっ！、止まってよ！…話と違う！何なのよ」

もはや男を足で押さえつけることさえ忘れ、掻き毟るように侵食を止めようとする。だが、彼女はもつと別の部分に気をやるべきであった。自信の相手にしていた男がどのような男か見失うべきではなかった。既に死に体だと侮るべきではなかった。

女が落とした拳銃、落下による床との衝突音はしなかった。そこにあったのは唯一動かすことができた男の右手。狙っていたわけではない、狙って起こるようなものではない。運といってしまうばそれまでであるが、チャンスを逃す男ではなかった。どんなに異常な光

景が目の前に広がろうとも、男のやることは変わらない。

混乱する女に向け、迷いなく引き金を引いた。

装弾されている全ての弾を吐き捨てる。殺しきれなかった女は今度こそ物言わぬ肉塊となった。

起き上がるのにはかなりの時間を要した。男はすっかり動かなくなった女の死体を眺めながら、今更ながら異常な光景に目を奪われていた。消えていった腕の侵食は死んだ時点で停止したのか肩の付け根で止まっている。

「訳がわからないが、助かったな」

神など信じたことのない男ではあるが、今回ばかりは何か超常的な力が働いたのではと勘繰りたい気持ちでいっぱいであった。しかし、仮に超常的な力が働いたとして、神が存在したとして、果たして今この状況で男が生き残る術はあるのだろうか。体は既に満身創痍、戦いに勝ちましたが傷が治る訳でもなければ、失った血液が戻ることもない。言葉で助かったとは言って見たものの全く助かってなどいない。ただ死ぬのをほんの少し先延ばしにしただけのことだ。

結局は死ぬのだから、いつそ女の命を奪う必要などなかったのではないか。むしろ訳の分からない怪奇現象の結末を最後まで見届けていたほうが生産的であったのではないか。そんなことを考えながらも男は歩く。確かにこのままでは男は死ぬだろう。今でさえ動いているのが不思議な状態だ。男自身もこんなに苦しい思いをして、何故生きようとしているのか判ってはいないのではないか。

男はいつの間にか自身のトランクケースの前にまでたどり着いてい

た。距離にしたらほんの数歩であっただろうが、男にとってはそれほど遠く感じられたことか想像を得ない。生への執着とでもいえばいいのか、男はほとんど無意識のまま傷の手当を始めた。救急キット位は常備している。しかし、傷口を消毒しようとも沁みることさえなく、包帯をまこうとする腕さえもまともに動かなかった。もはやこれまでかと感じていた。そのとき一つの気配が男に近づく。

「うわっ、まだ生きてるよ」

空気を読まない第一声。男には聞き覚えのない女の声だった。格好はあまりにもこの場にそぐわないものである。上はTシャツ一枚、それも子供向けアニメのキャラクターがでかでかと印刷されている。色はピンク、とても大人が着れるようなものではない。更に下はダボダボのジャージに便所サンダル。唯一、一般人ではないと判断できる要素は肩にライフフルらしきものを担いでいる所ぐらいだろう。それがなければコンビニまで酒でも買いに来た小汚い一般人である。

「はじめまして、でいいよね。確か直接会うのは初めてのはずだ。うん」

「…誰だ」

こんな状態でも気丈に対応する男。声を出せる程度には落ち着いていたらしいが、当然無理をしている。

「君を撃った狙撃手さ。魔弾と言えば判るかな？結構有名なんだけど。最もこっちは本業じゃないんだけどね」

「…嘘を付くな。お前みたいなスナイパーがいるか」

余りにも場違いな格好に飄々とした態度から男は信じようとしなない。何より信じたくなかった。抵抗する術など既がない。

「あれ、やっぱり信じちゃくれないか。格好が悪かったかな。楽でいいんだけど」

「…」

「まあ、君が信じなくても事実です。私は気にしない。ついでに言っておくと私はずっとこのビルの屋上にいたんだよ。君を撃つたのはリモートさ。便利になったもんだね。携帯端末でちょちっと座標を送信してね」

説明を求めた訳でもないのにペラペラと話す自称魔弾。信じてもらえなかったことは気にしているらしい。

「殺しに来たのか」

「そのつもりだったんだけど。今君を殺すと私も巻き込まれそうだからね。止しておくよ」

「巻き込まれる？」

自称魔弾の言葉に疑問を感じたそのとき。ゴロンと鈍い音を立てて何かが転がった。そこには腕があった。見覚えのあるコートの袖、使い慣れた太い指、そこには男の左腕が転がっていた。

「おいおい」

今度は俺かよと漏らす男。意外に冷静である。男の左腕は千切れた訳だもなく、自称魔弾により外傷を負わされた訳でもない。肩の付け根、そこに在るべき接合部が消えただけだ。ちょうど女の受けていた侵食の続き、女を殺したから男に来たと考えればそう不思議なことではないかもしれない。

「存外、冷静だな君は」

少し呆れた口調の自称魔弾、こうなることを予期していたらしい。

「俺はこのまま死ぬのか？」

「多分、死なない。むしろこれのおかげで死なないで済むといった方がいいかな。詳しくは直ぐにわかると思うけど、不運なことに代わりはないか」

「何故、判る」

「こっちの方が専門なんだよ。オカルト的なことって言えばいいのかなあ。まあ、上手くすればまた会う機会もあると思うからそうしたら説明してあげる。頑張りたまえ」

いつてらっしゃい、と気の抜けた見送りをする自称魔弾そして

「そうだ、箱は私が回収しておくから安心して。良いようにはならないけど悪いようにする気もないから」

言い終わった時には男の体は消え去っており、残されたのはボロボロの左腕のみだった。

第一項

深い森の中に人知れず佇む洋館。もはやどれほどの年月その場に存在していたのか、緑に侵食されたそれは来る者を拒む要塞であると同時に、去る者を絡めとり逃がさないための檻のようであった。そこのいたる道などない。辺り一面に生い茂った草木には境界などというものは存在せず、只々一面に広がるのみ。そこを去る道などない。伸びきったツタは壁を覆い、幾重にも重ねられた鉄格子を思わせる。そんな廃墟と呼ぶに相応しい場所に何を間違えてたどり着いたのだろうか、二つの影が相対する。

「やめてください！成功するわけ無いじゃないですか！」

食ってかかるのはまだ幼さの残る女性。いや、少女といった方が適切な見た目12〜3歳の女の子だ。肩甲骨辺りまで伸びた赤い髪は毛先に行くほど癖と色が強くなっており、少女の怒りと共に今にも燃え出してしまいそうなほどに真赤な髪だ。更に相手を見つめる瞳、まるで大粒のルビーをそのまま押し込めたような真紅の瞳。丸く大きなその瞳にせがまれてたじろがない男性はいないだろう。しかし、相手は生憎と女性であった。

「はあゝ。もう決めたんだから、駄々をこねないで欲しいわね。だからそんな顔してもダメ。私の覚悟はもう決まってるの」

大きなため息とともに答えたのは銀色の髪を持つ女性。女性の長い銀の髪は結えられているが、屈み込むと目元に落ちてくるのか髪をかき分けながら一心不乱に何かしらの作業を続けている。

「冷静になってください！単身でマルクトにパスをつなげるなんて

できる訳ないじゃないですか！最高の術者が100人がかりで組みあげる大魔術ですよ！禁術ですよ！」

「大丈夫、大丈夫♪勝算はあるわ」

銀髪の女はそう言うと言えられていた髪を徐にほどき首辺りからバツサリと切り落とした。

「セフィリア様！」

驚愕に目を見開く少女。たださえ大きい瞳がこぼれ落ちてしまいそうだ。しかしセフィリアと呼ばれた銀髪の女は更に続け様に手に持ったナイフで手首を切り裂く。滴り落ちる血液は床に散らばった銀の糸の染み込んでいく。

「今、私に差し出せるものの全てを使ってパスをつなげる。それでもイエソドに残る最後の純血の一族よ。命をかければ術者100人分ぐらいの力は持ってこれる」

「駄目です！本当に死んじやいますよ！」

「この程度で死ぬなら遅かれ早かれ死ぬわ。なら、多少の博打も悪くないと思わない？」

こんな状況で笑って見せるセフィリア、既に儀式は発動していた。止めることは叶わない。むしろ無理やり止めれば、そのフィードバックで逆に死にかねなかった。

小さい部屋の床一面、はたまた壁、天井に至るまでまるで蛇が走るかのように文様が広がっていく。紫と黒の蛇がせめぎ合うようにして部屋を徘徊し描かれる魔方阵。

「紫と黒、イエソドとマルクトがつながったのは間違いないわね」

額に汗を流しながら笑を浮かべるセフィリア。形が固定された陣が光を放つ。

「後は何が出てくるか…ここからは賭けね…」

もはや見守ることしかできなくなった少女は潤んだ瞳をセフィリアに向けながら身動き一つせずに固まっている。紫はイエソド、黒はマルクトを表す。マルクトは黒以外にもレモン色やオリーブ色、小豆色でも表されるのだが選択されたのは黒。黒が悪いと言うわけではないのだが紫と黒で編まれた魔方陣が光輝く様は余りにも不気味であった。

「成功してまともなものは出てきませんよ。…こんなの」

少女がそんなことを口走った瞬間、光が跳ねる。キャア、という可愛い声も聞こえたがどちらのものなのかは分からない。

術が完成され光が収まる。そして二人の目の前には今までこの部屋にはなかったであろう物体。膨大な量の光に包まれたために一時的に視力が低下しており、直ぐには確認できない。だが、確かに何かを呼び込めた確信めいたものがセフィリアに走る。

「やった！せいこ…う？」

視力が戻り改めてまじまじと現れたものを見つめるセフィリア、そこにあったのは

一本の腕、ピッタリとした黒い布に包まれているものの明らかに腕であるとわかる見本のような人間の腕の形をした物体。指先から肩

までそろった綺麗な細腕であった。

「…嘘」

膝をつき四つん這いになってうなだれるセフィリア。そうしている間にも手首からは血が流れたままである。

「セフィリア様！傷を見せて下さい！」

我にかえりセフィリアに駆け寄る少女、承諾を待たずに治療を始める。治療と云っても手を傷口に添えるだけだ、そして何かを呟くと傷は綺麗に消えていた。

「ありがと、ミコット。…失敗しちゃたね」

笑ってはいるものの明らかに意気消沈している。しかし、たった一人でマルクトから物質を引き出しただけでも驚嘆に価する成果なのだが、如何せん使い道がない。

「セフィリア様…」

「私の価値なんて所詮腕一本程度、ということね、髪と血だけと考えればこんなものか…」

「気を確かに持ってください。こんな無茶をして、生きているだけで僥倖ですよ」

励まそうとするが、セフィリアは一向にうなだれたままだ。

「せめて」

「せめて？」

「食べようかしら？」

閃いたと言わんばかりに金色の目を見開いてミコットと呼んだ少女を見つめる。その目はまるで子供のようにはっきりとしている。

「何考えてるんですか」

「あら？ いい考えだと思わない？ 仮にもマルクトの人間の腕よ。体に取り入れたらすごいパワーが得られたり得られえなかったり」

「得られても食べないでください。人間の腕ですよ。食べたなら食いですよ。何でそんな突拍子もないこと考えつくんですか、常識で考えてください。第一この腕は今の今まで誰かの肩にくっついていたんですよ。いきなり腕が無くなってその人は絶対に困っています。そんな人の腕を食べるなんて正気の沙汰ではありません！」

あまりの剣幕に気圧されたのか、少し引いているセフィリア。そして口を開く

「そ、そうね。どうかしてたわ。ごめんなさいミコット…」

「わかってくれましたか」

理解を示してくれたセフィリアにホッと胸をなでおろすミコット。しかし、

「生は無理よね。せめて焼かないと…」

「調理法の問題じゃないです！」

全く理解されていなかったことから思わず声が大きくなる。

「わ、わかってるわよ。いきなり食べたらどうなるか判らないものね、まずは誰かに食べさせてから…」

「食わせるんかい！」

「あ、どうせならミコットが食べる？あなたに更に力が加わったらすごいことに」

「食べるかぁ！」

口を大きく開けてクワツと威嚇するミコット。残念ながらその容姿のせいでまったく怖くない。まるで毛を逆立てた小動物。子リスか子猫が威嚇しているようなものだ。それを見て突然セフィリアがミコットに抱きついた。

「ちよ、え？セフィリア様？」

「うあ、もう可愛すぎ。なんでこんなに可愛いんだろ。もう、ハグハグしちゃうんだから」

「やめてください。あ、やめ、そこは、……やめろっていでんですよ！この馬鹿王女！」

「はうっ！」

ミコットの拳が鳩尾に突き刺さりひっぺがされる。王女と呼ばれたぐらいであるからミコットの方が身分は下であろう。それでも躊躇のない渾身一撃を決め、ふんぞり返っている少女がそこにはいた。

「いい加減にしてください。消し炭にしますよ」

少女とは思えない圧を飛ばすミコット。その目は余りにも冷たく、言うことをきかなければ本当に消し炭にされそうな勢いである。

「ごめんなさいでした！」

あろうことか土下座、それも地面に頭を擦りつけるほどに深く。確かに王女と呼ばれていたはずなのだが威厳の欠片も存在しない。よほど慣れているのか一連の動作は洗練すらされており、土下座だと

いうのに美しさが感じられる。

「はぁ、もういいです。頭を上げてください。仮にも王族なんですから、気安く頭を下げないでくださいよ」

さすがに呆れぎみのミコット。おそらく日常的なやり取りなのだろう、諦めにも似た表情で窘める。

「そうね、冗談はこのぐらいにして」

「：冗談だったんですか？」

「半分ぐらい。さすがにそんな無茶はしないわよ。多分：」

半分は本気だったのかと思案すると共に最後の「多分」に引っかかりを覚えるミコット。絶対に目を離さないようにしようと勝手に心に誓う。

「それで、実際どうしましょうか？これ？」

「仮にも私の命をかけて呼び出したものよ。無駄にはできないわ」

「所詮、腕一本分の命ですけどね」

「最近遠慮ないわね。泣くわよ」

無駄な会話も混ざっているが、本当にどうしようもないのだろう。途方に暮れてしまう二人。セフィリアは土下座の姿勢から上半身をお越し、そのまま近くの壁にもたれかかる。隠してはいるが辛そうだ。くだらない発言を続けているので判りにくいが相当疲弊している。

「本当に、大丈夫ですか？」

「どうなんだろう。初めてのことだから判らないけど、体中の力が一気に吸い取られた感じかな。生きてるから問題ないと思うけど」

今になって息が荒くなってくるセフィリア。心配させないように無理をしていたらしい。

「お水、持ってきますね。待っててください」

「ありがとう」

私がいらない間に食べちゃ駄目ですよ。と付け加えて部屋を出ていこうとするミコット。しかし、

「あれ？」

ガチャガチャとドアノブを回すが一向に扉が開く気配がない。古い屋敷なので立て付けは差ほど良くはないのだが、それにしたところで異常であった。そしてミコットが一つの事に気が付く。

「セフィリア様、ちょっといいですか？」

「開かなかったら壊しちゃってもいいわよ。別に使っていない部屋だし」

「壊したら誰が直すと思ってんですかって、そうじゃなくて、これ。この魔方陣、いつ消えるんですか？」

「へっ？」

セフィリアの行なった儀式により浮かび上がった魔方陣、紫と黒で編まれた不気味な文様は未だに部屋中に走っている。もちろん、扉の上にも一様に広がっていた。普通は儀式や術式が完了すれば魔力で編まれたそれらは消え去るもののだが一向に消える気配は無い。仮にもイエソドとマルクト、二つの世界をつなごうとした魔方陣だ。少女の細腕一つで壊せるものではない。

「まだ、終わって…いない！」

セフィリアが気付き言葉を発すると共に再び魔方陣が光を放つ。光とはいっても紫と黒、辺はどす黒い色に侵食されていく。

「がっ！」

光が増すと共にセフィリアが勢い良く吐血し、純白のドレスが赤黒く染まっていく。白地に赤と非常に判別しやすいコントラストがミコットの危機感を激しく刺激した。

「セフィリア様！」

「来るな！」

近づくこうとするミコットを間髪入れずに静止する。何故止めたのか自分にも判ってはいない。今の状況を飲み込めてなどいないのだから。

（何よ…これ。まだ、儀式は終わってなかった？何らかの干渉で一時的に停止していた？でも、外部からの干渉なんてできるわけ…）

セフィリアは事態を必死に飲み込もうと思考を巡らす。しかし、そうしている間にも体からは夥しい量の魔力が吸い上げられていく。いや、最早生命力といった方が正しいか、確実にセフィリアの命を蝕んでいた。

「誰よ…術者100人分…なんていったの…全然足らないじゃない」

遂には精神だけではなく、肉体にまで影響が出始める。白い肌は所

々裂け、内蔵が痛むのも実感できた。筋肉が断裂していつているのだろう、微かにプチプチと引きちぎれる音も聞こえる。終には純白のドレスが均一な深紅のドレスへと姿を変えた。元々この色であったと言われれば信じてしまうほどに綺麗に染まっている。

「死んで：たまるか：私は取り戻すんだ」

そんな状態になってもセフィリアの目は死んでいなかった。絶対に生き残るという強い意思が確かに宿っている。彼女はどうかあっても死にたくないらしい。

「そんなに、欲しければ………持って行け！」

大声でそう叫ぶとありったけの力を魔方陣に叩き込む、セフィリアの全身から銀色の眩い光が発せられ充満していた紫と黒の光を飲み込んでいく。

一時の静寂、光は消え、壁に走っていた紫と黒の魔方陣も消え去っていた。唯一動けるであろう少女、ミコットはまだ何が起こったのかも理解できず辺を見渡している。

視界に入るのは二つの人影、一つはみコットもよく知る人物。セフィリアという王族の女性、この二人の関係は判りかねるが少なくとも悪い関係ではないだろう。

そしてもう一つは黒い塊、おそらくは人。だが異常であった。明らかにボロボロである。着ている服は所々破け、黒い生地だというのに明らかに血で染まっているのが判る部分もある。見た目からも全く精気は感じられない。生きているのかすら疑わしい。

もはや半分放心状態でセフィリアへと近づくミコット。こちらを負けず劣らず死体のようだ。この後死体を二体片付けると思うと頭が痛い、などとは考えていないだろう。しかし、葬儀の用意を先にした方が効率的だと思わせる状況だ。

「セフィリア：様？」

「：ギリギリ：だった」

弱々しいながらも返答があり、ミコットの顔が一気に綻ぶ。今にも泣き出しそうだ。

「今、治しますね」

近づけば一目瞭然、セフィリアの体は傷だらけでとても見られてものではなかった。涙を拭いながらミコットは治療を始める。しかし先程より傷の治りが遅い。相当に危ない状態であった。

「大丈夫です：絶対、治しますから」

「ええ：信用：してる。それより、あれ」

体を動かすことはできないようで、顔を軽く動かして指し示す。その先には黒い塊。

「多分、マルクトの人間。ですよ：生きてるんでしょうか」

「死体だったら：ノーカウントでお願い」

「無理ですよ：」

セフィリアはそのまま倒れる様になり眠ってしまった。呼吸は安定しており、本当に一命は取留めたようだ。

「寝ちゃい、ましたね」

優しい笑で子供のように眠るセフィリアを見つめるミコット。治療を続けること数分で目に見える傷はほとんど消えていた。もっとも、体の中はどうなっているかは判らない。今後も予断を許さないだろう。

「あとの問題は、あれをどうするか、ですね」

判断を仰ぐべき術者の意識はない。かといって放って置くこともできない。今度こそは本当の意味でセフィリアが命をかけて呼び出した人間。死んでいるならともかく、生きていたのであれば助けなければならぬ。そうしなければセフィリアが目覚めた時にとっても顔向けできない。

まあ、死んでしまったら最初から死んでいたことにすれば何の問題もないのだが。この少女はそんなことを考えつくほど腐ってはいなかった。

「…生きてますか？…意識はありませんか？」

意を決して近づき指先で軽くつつきながら声をかける。それでも一向に反応はない。拉致があかないので思い切って脈を確認すると、トクトクと脈打っていることが確認できた。よく見れば呼吸もしている。

「生きてる…みたいです」

危険はないと判断しこちらも治療をしなければと服をはぎ取ろうとするミコット、一番上に着ていた大きめのコートは直ぐに脱がすこ

とができたが、その内側はミコットとしては理解不能、複雑に絡み合った幾つものパーツからなっており全く外し方が判らない。

「どうなってるんですか、この服は」

もういいやと服脱がすのを諦めて傷の手当を優先しようと思えば人間全体に無理やり治療を施そうとするが手応えが全くなかった。

「えっ？この人、怪我してない？」

見た目は明らかにボロボロであったのに、傷らしい傷はひとつも見当たらなかった。血は付着しているのに出血した形跡がまるでない。服が敗れているので返り血のみとも考えにくく、全くもって異質な状態だ。

「あゝ、私にどうしろって言うんですか。誰か教えてくださいよ。」

そんな叫びは誰にも届かず、虚しくこだまするだけであった。結局は二人の人間をベットまで運ぶことになったミコット。運ぶ間に何度か二人の頭をぶつけてしまったのは彼女だけの秘密である。



自分が生きているのか死んでいるのか全く判らず、自身がどこに存在しているのかさえ酷く不安定な感覚。それが男が最初に感じた感覚だった。目覚めるとそこはベットの上、別に高級なものではない、普通のベットだ。しかし男はこんなにまともなベットで目を覚ますのは何時ぶりだろうと考えていた。まともではない仕事をして

いたこともあり、男は寝食には無関心極まりなかった。屋根さえあればどうにでもなる。雨水さえあれば一週間はもつ。そんな日常を過ごしたこともある。そんな男にとって何の変哲のないベットであろうとも正に至上の幸福を与えていたに違いない。それでも起きなければならぬことに少し名残を覚えながらもゆっくりと体を起す。

「ここは、まあ、知らないところだな」

所々寝癖のついた髪を整えながら辺を見渡す。そこは全く知らない部屋、装飾は北欧風であるがあてにはならない。今まで日本にいたのだ。空輸されれば途中で気付くだろうな、などと考えていたが、一拍して思考が止まる。

「あいつと殺しあって…」

それから、と言いかけた時、思い返して咄嗟に左腕を見つめる。そこにあるのは左腕、確かにっている。自分の意思で思うように動かすことができる。だが何かが違う。明らかにそれは自分の腕ではない。左腕にはピツタリとした衣服の一部、男にも見覚えが有るライダースーツの袖から肩の部分だ。嫌な予感が頭を駆け巡るがそのままにしておいても仕方がない。男は思い切ってその袖を剥ぎ取った。そこには白く透き通るような綺麗な細腕。薄く残っている傷などもあるが、そんな傷を受けた覚えもない。男の記憶が正しければもっとゴツゴツしてそれなりに毛が生えていたはずなのだが。

右腕と比べようと上着を脱ぎ始める。コートの下に着ていたのは薄手のボディアーマー、各種装備と連動させた特注品であり、至るところに小細工がしてある妙な服だ。よくよく見れば幾つかのパーツははずそうとした形跡があるが、途中で諦めたのだろう。この姿の

まま寝かされていたのを思えば簡単に予想できる。手早く上着を脱ぎ上半身裸になる男。その体はまさに百戦錬磨と言っているいい体つきだ。無駄なく付けられた筋肉は関節の稼働領域を制限しないように計算されているかのようだ。更には刻み込まれた傷後はこの男の並々ならぬ戦歴を物語っている。

男は上半身裸のまま両腕を前に出す。そして

「気持ち悪っ、何だこれ？」

前に出された腕は左右で明らかに長さが違う。見比べれば歴然、左腕が男のものである訳がない。細く長い指を見ていると自分に付いていると判っていないながらも心拍数が少なからず上昇してしまう。

「って、やっぱりこれはあいつの腕、になるのか」

意識を失う前のことを思い返して無理やり納得する。戦いの真下、消えていった女の左腕、意識を失う前にこぼれ落ちていった自らの左腕。荒唐無稽な話ではあるが男の考えた通りなのだろう。他には考えられなかった。

「拒絶反応とかはないのか？」

疑問に思い左腕を舐めまわすように観察をする。肩の接合部を見れば明らかに境界線だと判る肌の色の違いにも気付いた。けれどもそれ以外に一向に不振な点はない。試しに服に隠してあった小型のナイフを振り回してみるがなんの問題もないナイフさばき、いや、むしろ以前よりやりやすくなったのではないだろうか。

「ずるいな。細い指ってこんなに使いやすいものなのか」

これなら複雑な作業ももだいぶ楽になるんじゃないか、などとも考えてしまう。考えることが一々小さい男である。手の動作を確認するためナイフを弄りながら、目の前の扉を的に投擲を始める。

トトトツ

と音を立てて突き刺さる数本のナイフ。それを確認して男が首を軽くかしげた。

「使いやすいが少しイメージがずれる。修正しとかないとな」

最後に一発と手元に残ったナイフを投げる。男が言った通りイメージがずれるのか、左腕で放ったそれは男の狙いよりほんの少し下に落ちてしまった。しかしどうして、ちょうどその時、なんとも間の悪いことに扉が開かれた。

「ひゃうあ」

「あ」

入ってきた人物の頭頂部ギリギリをかすめて、トツという軽い音とともにナイフは扉の先の壁に突き刺さる。もしも入ってきた人物の背が今よりほんの少しでも高ければ、目も当てられない惨状と化していただろう。

「な、な、な、何するんですか！殺す気ですか！食べる気ですか！」

「いや、すまない。殺しても食べる？つもりはないんだが」

「やっぱり、殺す気ですか！？」

扉を開けたのは赤い髪の少女、ルビーの目を持つ小動物といった感

じだ。服装は女の子らしい襟付きのピンクのワンピース。どこぞの自称魔弾などより何千倍もピンクの似合う少女だ。加えてレースの施された薄手の白いストールにロングブーツ、二の腕まである長い手袋もしている。異様なのは腰に巻いたベルト、ベルトそれ自体はお洒落なものなのだが、人を軽く殺せそうな古風な短剣を帯びている。少女に不釣り合いなものだ。

「ええと、今は殺すつもりはない」

「それって結局殺すつもりじゃないですか！」

「間違えたか：面倒だな、いっそふん縛って：」

「ひっ、せ、せっかくベットまで運んだっていうのに、この仕打ちは何なんですか？ 私何か悪いことしましたか？ もう、皆消し炭にしちゃいますよ」

何やらブツブツ言い始めたかと思えば、最後の方には物騒な発言も聞こえてくる。こんな少女に抵抗されたところで何の問題もないだろうが、良心は多少なりとも痛むものだ。穏便に話を進めようと男が言葉を選ぶ。

「ベットに運んだってことは、お嬢ちゃんが助けてくれたのか、怖がらせてしまったね。殺さないし、何もしないから落ち着いて」

「あ、いえ。こちらこそ、取り乱してしまって。最近変な人の相手しかしていなかったもので気が動転してしまいました」

いきなり優しく接してくる男に意表をつかれて余計なことも口走る少女。変な人とは果たして誰のことを示すのか。

「いやあ、こちらも状況が理解出来ていなくてね。出来ればまともに話のできる大人を連れてきて欲しいんだけど」

「今対応出来るのは私しかいないんです。よろしければ解る範囲説

明しますが」

「そうか、じゃあ家の人が戻って来るまでお願いしようかな。それにしてもすっかりしたお嬢ちゃんだ」

「あの、何だか凄く馬鹿にされてる感じがするんですが。気のせいでしょうか？」

扱いが明らかに子供である。少女の見た目は確かに幼いので仕方無いかもしれないが、さすがにお嬢ちゃんは無いかもしれない。実際、少女自身は気に食わない様子だ。

「留守番とかしてるんじゃないのか？親御さんは買い物か何かかな？」

「色々と説明することが多そうですが、一つだけ、まず、言わせてください」

「ああ？どうぞお嬢ちゃん」

「私はもう十七だー！」

雄叫びを上げる少女、クワツと口を大きく開けて威嚇する。男には小動物か何かが毛を逆立てているようにしか見えない。むしろこの行動が少女をより幼く見せてしまっている。

「あ、え、嘘！」

「ホントです！」

「…」

「…」

短い沈黙が場を包むが全く圧はない。その後、まず男が沈黙を開いた。

「ははは、またまたあ、何これ？ドッキリ？またあの野郎が絡んで

るんじゃないだろうな。今度は社会的に俺を抹殺するつもりか？ いやいや、そもそも俺に社会的な地位なんても元々なかったな。だとすると単なる嫌がらせか。全く手の込んだ悪戯だ。こんな幼女に協力を頼むとはけしからん」

なにやら色々心当たりがあるらしい男は、勝手に状況を推察し納得しようとしている。

「一人で間違った方向に解釈して納得しないで下さい！ 後、幼女ってなんですか！ 幼女って！」

「おっと、お嬢ちゃんに幼女は失礼だったな。さすがにもう女の子って感じかな。いろいろ気になるお年頃だって、ぬあ！」

怒りが沸点に達したのか少女がいきなり飛びかかる。男はギリギリで躲すが意外な速さに目を丸くした。

「ちい！ やはり罠か！ こんな幼い子供に手を出させるとは！」

小さな子供を使い油断させて標的を仕留める。男の居る世界ではよく有ることだ。そんな下種な行いを思ったのか男の顔が陰しくなる。

「いい加減にし下さい！ 脳みそが膿んでるのは一人で十分です！」

再び男の方へ向き直る少女。脳みそが膿んでるとは果たして誰のことを示すのか。この厄介な勘違い男をどのようにすれば説得出来るのか頭が痛む。

「うん、わかった。いい加減にしよう」

「えっ…はい？」

以外にも男はあっさり受け入れて、場を治めようとする。少女にとっては望んだ展開だが肩透かしをくらった気分だ。ほうけている少女に向かい男は続ける。

「ああ今のは流れた。気分転換にちょっとからかったただだから気にするな。御免な」

男の台詞にワナワナと震え出す少女。少女は常日頃悩まされている変人とは別の意味で厄介そうだと男への警戒心を一段階上げる。

「心がこもってません！後お嬢ちゃんって言うな！」

「すみませんでした！お嬢様！」

土下座とまでは言わないが、深々と頭を下げる男。小さな少女に正しい姿勢で詫びる姿は異様でもあり滑稽だ。この男は非常にノリが良いらしい。

「いえ、そんなすごい勢いで謝られても困るんですが。って今度はお嬢様？」

「いやあ、お嬢ちゃんを見てると何だかこうしなくちゃいけない気がする」

「はあ、もういいです。私って何時もそんな役回りなんですよ。何だか悲しくなってきました…」

大きなため息、何とも云い難い達観した表情を浮かべる少女。幼いのに苦労しているようだ。彼女の発言が事実なら十分に大人ではあるのだが。

「ふむ…取り敢えず子供扱いはやめよう。で、説明は頼んでいいのかな」

少女の表情から何かを感じ取ったのか、いい加減話を進ませたかったのか、それともあきたのか、少しまともな表情で男が説明を促した。

「そうですね。いつもこんな感じで話が脱線していちゃうんですよ。今はそんな場合じゃありませんもんね」

「いつもこんな感じなのか」

「残念ながらいつもこんな感じです。話を戻してもらったのは久しぶりですよ」

「脱線させたのも俺だな」

「………」

少女は男の評価をタチの悪そうな人からタチの悪い人上げて確定する。自分の周りにはどうしてこんな人間しか集まって来ないのだろうと思いつつも気を取り直し話を進めようとする。

「お茶を用意しますんで待っていてください。説明には多少時間かかると思いますんで」

訂正、進めようとしたが一旦退却、もとい準備をすることに決めたらしい。

「ああ、この部屋で構わないのか？」

「椅子とテーブルもありますから。ただ、上着は着ていただけると助かります。それでも年頃の女の子なんです」

そういわれて男は自分が上半身裸であることを今更ながらに認識させられる。気にしてはいないのだが、確かに十七歳の少女と二人っきりで半裸は不味いだろう。

「レディに対して随分失礼なことをしてしまったみたいだな。改めて詫びよう」

男はやや大袈裟に誤ってみせる。

「急に大人扱いしても遅いですよ」

わざとらしい口調にむず痒さを感じながら笑顔で返す少女。わざとらしいがそれなりの対応は出来る人間であるようだ。

「これは手厳しいな、失礼ついでに一つ頼みがあるんだが」

「普通そんな頼み方しませんが、出来る範囲でなら構いませんよ」

「大したことじゃない上着を一枚貸してもらいたただけだ。着ていたのがボロボロでな。それでも年相応の男の子なもんで人目を気にする方なんだよ」

「なんですかそれ」

人目をきにする前に自身を省みるべきだと思いつつも、余計話が脱線しそうなので少女はそのまま部屋を後にする。

男はそれなりに少女が信用できそうなまともな人間だと（自分のことを棚に上げて）評価した。しかし、このまま和気藹々とお茶をできるほど彼は純粹ではない。少女が出ていくと直ぐ様準備を始める。不足の事態が起こった時のための準備。このまま何事もなく、お茶をしながら事態の説明を受ける。そうなるに越したことはない。

だが、一方で違う可能性も考慮する。今しがた出ていった少女が嘘をついているようには見えなかった。本当に少女しか居ないのかもしれない。しかし、自分をこの部屋に留めて、仲間を呼びにいった

可能性も捨てきれはしない。あるいは少女自身が騙されて動いている可能性もある。

何にしても武器は必要だと、部屋を出て壁に突き刺さったナイフを回収する。脱がされたのかコートがなかったため大部分の装備（主に刃物）が剥ぎ取られた状態であった。まともな得物は足首に隠していた小型の拳銃、直ぐに使えるように足首からベルトに移す。更に少女に上着を頼んでおきながら脱いだボディーマーを再び着込む。少女への頼み事は単なる時間稼ぎとしか考えていない。

（現状、この程度しかないか…）

改めて装備の乏しさを実感する男、しかし、文句を言っても始まらない。部屋に使えるものがないか物色しようと近くの引き出しに手を伸ばそうとする。とその時向かってくる足音に気が付いた。

（早いな、もう少しかかると思ったが）

足音は一つ、大人のものではない。おそらくは先程の少女と見て間違えないだろう。しかし早すぎる。少女の言葉通りお茶を用意して、上着を見繕えばそれなりに時間を要するはずだ。直ぐにズボンから拳銃を抜き、扉の近くの壁に背を這うように密着させ息を潜める。この男は何かあれば少女を躊躇わずに殺すつもりだ。

コンコン

扉が優しく叩かれた。許可なく入らない辺りは教育が行き届いているといえる。

「どうぞ」

自然な返答で警戒の色など微塵も感じさせない。許可を得て直ぐに扉が開かれる。入ってきたのは先程の少女、何ら不振な点はない。

「上着もって来ましたよ。って何してるんですか？」

「い、いや、何でもない。意外に…早かったなと思ってな」

むしろ男の方が不振人物だった。銃を手に扉横で少女を待ち構える男。唯の犯罪者にしか見えない。至近距離見つめ合う二人。直ぐ様目をそらしそうなものだが何故か少女は壁に張り付いている男の顔をじっと見詰めている。

「…な、何か付いてるか？」

「あ、すみません。性格に反して凄く綺麗な瞳だから見入ってしまいました」

「ん？そんなに珍しいか」

黒い瞳がそんなに珍しいのかと思案しながら、男は完全に毒気を抜かれてしまった。性格に反しての部分はあえてスルーする。男自信自覚しているのだ。少女は本当に上着を持ってきただけのようだ。これで手に持った上着の中に武器を隠していたら大した演技力である。

「ええ、こんなに澄んだ青い瞳を見るのは初めてです」

「青？」

「はい、でも左目は黒なんです。左右で色が違うのも珍しいです。あ、もしかしてマルクトでは当たり前なんですか？」

男にとって意味の判らない単語も飛び出しているが、そんなことよりも気になる発言があった。左右で色の違う瞳、それが指し示すも

のは一つ。今になってようやく思い出した殺し合いの一幕。嫌な感触が思い起こされる。食い込む細い指、ぐしゃりと潰れるガラス体そう、確かに男の右目は潰されていたはずなのだ。何を隠そう今男の左手に付いている親指によって。

「鏡はあるか」

「え、はい。ちょっと待ってくださいね。確かここに、あった。小さいですけどこれでいいですか」

何時も持ち歩いているのか少女は手鏡を差し出す。あまりに真剣な男の形相に理由を問うことは躊躇われた。手渡された手鏡で入念に自分の顔を確かめる男。

（青い瞳、これもあいつのものか…？）

鏡に映ったのは確かに見慣れた自分の顔。しかし、少女の言ったように右の目には澄んだ青い瞳が埋め込まれている。

（左腕は判らなくもないが、瞳は前後関係がおかしい。いや、今更おかしいも何もないか…）

既に左腕が自分のものではないと確信している男。潰れた右目が見える時点でこちらも似たような現象に見舞われたのだと無理やり納得させる。

「あの、何かありましたか？」

あまりにも難しい顔をしていたのか、一応心配して話しかける少女。全くもって訳が判らないといった表情だ。

「大したことじゃ無い。傷が消えていると思ってな」

「傷？ やっぱりどこか怪我をしてたんですか？」

「やっぱり？」

「ええ、着ている服がボロボロでしたから。でも、見たところ外傷はなかったと思ったんですが…あ、コートと荷物はこちらで預かってますのでご心配なく」

「外傷が…ない？」

言われてみれば不自然であった。腕と目、欠落していた部分が補われていることでそちらに目が行ってしまっていたが、先の戦いで負った傷はそれだけではない。右足は撃ち抜かれ、身体中青痣だらけであるはずなのだ。

「手当が必要でしたら行きますよ？」

「いや、大丈夫そうだ。上着、ありがとう」

「いえ、待たせてしまったみたいですね」

時間としてはほとんど経過していないのだが、男が既に上着を着ていたので気を使ったのだろう。

「謝ることはない。急に寒くなって着ていただけだ。こちらを使わせてもらうよ」

「そうでしたか、先に服だけはどうって優先したんでお茶はまだなんですよ。温まるように直ぐ持ってきますから、待たせてばかりで申し訳ありません」

そう言って再び部屋を後にする少女。男はその姿をみて急に馬鹿馬鹿しく感じてきた。

「…疑うだけ時間の無駄か」

この少女が何か企んでいるようなことはないだろうと、男は今更ながらに自分の矮小さに恥ずかしさを覚えていた。男は無言で上着を着替え、ゆっくりと少女を待つことに決めた。

第二項

ふと考える。こんなにも疑い深くなってしまったのは何時からであつただろうか。人を騙し、人に騙され生きてきた男にとって、疑うというこのは生きる術であつた。そうして生きてきたし、そうしないですんでいった人間を何人も知っている。

時に友と呼べる人間もいた。しかし、信用したことはなかったと思う。心の奥底、根底の部分で相手を否定し続ける自分がいる。だからこそ生きてこれたと男は本能で理解している。だが、一方で男は考える。この命はそこまでして長らえさせるに値するものなのかと、全てを疑い一人で生きていくだけのこの命に何の価値があるのかと。

それでも男は生きている。他の命を犠牲にして、貪欲に生にしがみつく。頭に浮かんでは消えていく幾つもの顔、それは男が殺してきた人々のものであろうか。親しかった友人もいれば名も知らぬ一般人もそこにはいる。新たに付け足された顔もある。いや、それは正しくないか、更新されたといったほうが良いだろう。そこに元々存在していた顔なのだから。そう、男が死んでいたと思っていた女性の顔だ。もし、あの時男が反撃していなければ、今ここにいるのはあの女性だったのかもしれない。意識が途切れる間際に聞いた台詞が頭をよぎる。

『むしろこれのおかげで死なないで済む』

自称魔弾が口にした言葉。信じるに値しない言葉ではあるが、この言葉が真実であるならば、あの時の怪奇現象が男の命を救ったということになる。自称魔弾の口振りから考えるに、あの現象に巻き込まれたのは女を殺したためであろう。男はまた人を殺すことでその

命を長らえさせたことになったのだ。

「らしく…ないな」

男は軽く左右に頭を振ると、椅子に座ったままの姿勢で軽く伸びした。更にそのまま首を大きくぐるっと回し、ゴキッと関節をならし覚醒する。見た目純真無垢な少女にあてられてしまったのか、男はどうにも調子が入らないでいた。

上着は少女の持ってきたものを着用済みである。差し出された上着は上質なシルク地のシャツで、非常に触り心地も良く清潔感に溢れていた。素人目にも高級品であると予想できる。合成繊維で作られた服ばかり着ている男にとっては違和感があるものの、それは悪い意味ではなく良い意味での違和感だ。気になる点と言えば袖や襟の部分に入った繊細な刺繍程度か。男性ものとはいえ多少気恥しいものがある。

コンコン

小さく扉を叩く音、先程の少女だろう。二度目だというのに律儀に入室の許可を待っているように入ってくる気配はない。ある意味融通が利かず面倒ではある。

「どうぞ」

今度は本当の意味で自然な返答をして招き入れる。もちろん先程の様な待ち伏せのはしない。椅子に座ったままだ。扉を開けるぐらいするのが紳士な対応ではあるが、残念ながら男にそのような素養は伴っていない。

「お待たせしました。お客様は久しぶりでしたので少し時間がかかっちゃいました」

そう言って入ってきた少女を見て男はなるほどと心で頷いた。

（確かにこれは時間がかかるだろう）

少女が押してきたであろう木製のカートの上にはお茶とお茶菓子、そして軽い軽食が鎮座している。この台詞だけ聞けば大したことはないのだがそれぞれ無駄にに気合が入っていた。

まず目を引くのはお茶、ティーセットからして明らかに一般のものではない。パツと見陶器でできた高級アンティークである。

（：マイセンっぽいけど微妙に違うな：どこの作品だ？）

むしろ鑑賞用ではないのかと思う匠の一品。そこに十数種類の茶葉のビン―おそらくはハーブの類いのもの―が並べられている。好みのものを選んでもらうつもりなのだろう。

ちなみに男のマイカップは100円ショップのプラスチック性マグカップだ。落としても割れないので気に入っている。そもそもお茶は大抵水出し、それ以外は水という体たらくなのでカップに気を遣うこともない。陶器類の見分けが付くのは仕事で頂戴：ではなく調達経験があったからに過ぎない。

「好みの葉を聞いておけばよかったですね。なるべく癖のないものを持ってきたんですけど」

「嫌いなものは殆どない。御薦めのものがあれば頼む」

「じゃあ私のお気に入りを御馳走しますね」

そう言って慣れた手つきでお茶を入れ始める少女。

「しかし凄いな」

「お茶は趣味なんですよ」

「お茶もそうだが、こちらの茶菓子も。甘いものはそれ程好みじゃないんだが見た目だけで食べてみたくなるな」

茶菓子は立方体にカットされた数種のケーキ。どこぞのカフェテリアで出てきそうな可愛らしさだ。あわせて綺麗にラッピングされた数種のクッキーも置いてある。

「これは買ってきたのか？」

わざわざ自分のような不審人物のために買っておいたのかと思うと申し訳ない気持ちになる男。しかし帰ってきた言葉は予想と違っていた。

「この辺にはお店がないんですよ。だから手作りなんです。味はあまり期待しないでくださいね」

「ケーキも作れるのか、なんでも出来るんだな。小さいのに」

小さいのという一言に、ピクッと反応したが気付かないふりをする。少女もわざわざ突っかけては来ない、確かに十七歳程度には大人なようだ。

「ケーキを作ったのは私じゃないですよ。うちの執事長が作ったものなんです。いい年してお菓子作りが趣味なんですよ、その人」
「執事とかいるのか？」

「一応いますよ。あまり一般的ではないですかね？」

「一般的ではないな。何人が殺った…じゃなかった会ったことはあるが」

「……」

少女は黙って明らかに不振な目を向ける。

「そんな目で見るな。単なる言い間違いだから」

「そうですね。そういうことになっておきます」

「しかし食事があるのは有難いな。最近ろくなもの食べてなかったし」

用意された軽食は色とりどりの具材の挟まったサンドイッチ。薄くスライスされたバケットで作られているようだ。

（しかし、これだけ用意してこの時間ならむしろ早い気がするな）

「そんなに食べてなかったんですか？三日も寝てましたし、もっと食べやすい物の方が良かったですかね？」

「ん？三日も寝てたのか。どうりでスッキリしたはずだ。まあ、食事はこれで構わない。栄養取れば何でもいいし」

「作り甲斐の無いこと言ってくれますね。まあマルクトの方の口に合うかわかりませんし、そういった意味では楽でいいですけど」

「…」

「どうかしましたか？」

急に黙り込んだ男にをみて首をかしげる少女。

「マルクトとか言ってるが？何だそれは、国名か？」

男の言葉にポンと手を叩き納得の様子を見せる少女。何かを思い出

したような表情だ。

「そうですよね。マルクトでは自分たちのいる場所をマルクトとはいいませんよね」

「確かに俺はマルクトなんて場所出身じゃないな。何かの勘違いか……というかそこらへんの説明が本題になるのか？」

お茶の準備が楽しくて忘れてました、と笑って誤魔化す少女。こんなやり取りを行なっている間でもお茶の用意は怠っていない、用意を終え男にお茶を差し出すと席へとついた。仕切り直しと言わんばかりにコホンと一度咳払いをして口を開く。

「では、あらためまして。私の名はミコットⅡルノアール。メレク王国第四王女セフィリアⅡレーシュⅡメレク様付きの従者をやっております。まずは我々の都合により召喚してしまったことへのお詫びと、召喚に答えて頂いた礼を我主人に代わって」

「意味が判らん」

仕切り直した丁寧な挨拶は男の無慈悲一言で一刀両断されてしまった。

「……さっきまでのノリの良さは何処にいったんですか。真面目な私が馬鹿みたいじゃないですか」

「真面目なものにはノリにくいんだよ。というか普通に話してくれ、挨拶とか礼とかいいから」

「はあ、わかりました。あ、お名前だけ先に聞いておきたいんですけど。私も名乗りましたし、知らないと話すのも不便ですので」

男の反応に膨れてみせるミコット。あれだけ話しておいてまだお互いに名乗り合っていないかったというのも可笑しな話だが、タイミン

グを逃すと案外自己紹介などしないものなのかもしれない。

「名前か…」

何かを考え込む男。名前を名乗るか否かを検討しているようだ。そもそもこの男の名前は未だに不明である。本名を名乗る気はないのだろう。偽名ということなら何個も持ち合わせているかもしれないが、その中でもどの偽名を使うべきか考えなくてはならない。

あまり世間に知られたくない名もあれば、あくまでも一般用の名もある。もちろん仕事用の偽名もだ。要するに男は目の前の少女をどう扱うべきか計りかねていた。

「呼びたいように読んでくれ、名前なんて特定できればなんでもいい」

「名乗れない理由でもあるんですか」

「あると言えばあるような気もしなくはない」

「では、ないと思ってください」

一歩も引きそうにないミコット。なぜか聞き出そうとする気満々である。

「遠慮がないな。では、こうしよう」

「普通に名乗ればいいじゃないですか」

「こう見えてもシャイなんだよ。じゃなくて、実は自分の名前が思い出せないんだ」

「今、こうしようとか言いませんでしたっけ」

「幻聴だ気にするな、一時的な記憶喪失とでも思ってくれればいい」
「あなたが一時的『こうしよう』といったことを忘れたわけですか」

「いや、そうではなく、俺が目覚める前の記憶が喪失しているとい

う話だ。わざとやってないか」

「あなたに言われたくありません。それで、ろくに何も食べてないことを覚えているあなたが記憶喪失だとしてなんとお呼びずればいいでしょうか」

ため息混じりに結局は折れてくれるミコット。実に優しくはあるが名を名乗れと言っていることにはわりはない。聞いているのが本名から呼び名に変わったただけだ。

「そうだな。自分に自分で名前をつける趣味はないし、今までの偽名は支給されたのをベースに使いまわしていたからな」

「偽名って…口に出して考えないで下さいよ。付き合ってるこっちが虚しくなります」

もはや隠す気もないのか、今したばかりの会話を全否定しそうな発言を口にする男。ミコットはもはや苦笑いである。

「よし、名前を付けてくれ」

「はい？」

あろうことか丸投げである。予想だにしていなかった一言に疑問を通り越して呆れかえっているミコット。この男はミコットの困惑する顔が見たいだけでやっているのではないだろうか。

「記憶を失い、ここがどこだかも判らない可哀想な一人の男に名を与えてくれ、と頼んでいる」

男は何やら台詞口調な上に、大げさに振りを付けて頼み込む。このわざとらしい言葉だけでも相当頭にきそうだがミコットは冷静に対応する。

「まさか、会ったばかりの男性に求婚されるとは思ってもみませんでした」

否、ボケをボケで返したただけだった。

「お前の名前をくれてって意味じゃない。名前をくださいって、随分古風なプロポーズ知ってるな。しかも明らかに俺が婿養子じゃないか。こっちも、そう切り返してくるとは思ってもみなかったよ」

そう言って笑みをこぼしながらゆっくりと目の前に用意されたお茶を口にする男。本当に話が長くなりそうであったので、今更ながらお茶があって良かったとも感じていた。

「うまいな」

そして男は意外にも素直な感想を述べる。

「ありがとうございます。今のは中々に気の利いた切り返しかと」

「そっちじゃない！お茶だ！お茶！」

「冗談ですよ」

お気に入りの特性ブレンドなんですと付け加えてミコットもお茶を口にする。ついでに茶菓子も勧め、しばし心を落ち着かせるための無言のお茶会が進行した。

「話が長くなりそうでしたので。つい遊んでしまいました」

「遊ぶなよ。まあ俺も人のことは言えないか。しかし、ちようどいい名前もなくてな。出来ればこの辺で不信に思われないような名前が欲しいんだが」

男はミコットルノアールという名を聞いた時点でどうしたものかと思案していた。どう聞き間違えても日本人の名前ではない。ミコットの容姿も同様だ。男が目覚める前の記憶では日本にいはずだが、いろいろと不明な点が多くここが日本なのか外国なのか断定できない。これで会話に用いている言語が日本語でなければ外国だと断定もできたのだろうが、目の前の少女が使うのは流暢な日本語だ。それも割と的確なツッコミを入れられる程の日本語。明らかに外人である少女が日本語を話す様はまるで映画の吹き替えを見ているようで奇妙でもあった。

男は仕事を行う場所によって名を使い分けることが多い。国に合わせ、人に合わせ次々と名を偽る。時に目立たぬように、時に親しまれるように自らを偽り続けた。純粹な日本人でないことも幸いした。その容姿からアジア系、北欧系の名を用いても怪しまれることもなく仕事に勤しむことができたのだ。

「そういうことですか、確かにイエソドでマルクトの固有名称は目立ちますね。本名を隠すというのは気になりますが初対面ですし了承しましょう」

「納得した理由が意味不明だが、了承してもらえてなによりだ」

会話が成り立っているのかいないのか、とりあえずは進行を見せ始める。

「しかし名前ですか……いきなり言われても案外出てこないもんですね」

「一般的で使いやすく、それでいて不振に思われない、かつ俺を的確に表した素晴らしい名前であればなんでもいいんだが」

今日初めて話したというのに遠慮なく無茶を言う男。

「喧嘩売ってます？」

「ペットの名前とかじゃなければなんでもいいです」

「よろしい」

男の戯言を一蹴して、ミコットは諦めにも似た感覚で名前を考える。

「ではタヴでどうでしょうか？ 性は私と同じルノアールを名乗っていただくということぞ」

意外にも直ぐに名前の案が提示された。

「タヴか…わかった。それでいい。何か意味がある名前なのか」

男にとってはあまり聞き慣れない響きであったが、どの程度一般的な名前なのか判断する術はない。不都合があればまた別の名を考えれば問題ないので、男は取り敢えずの間に合わせ程度にしか考えていない。

「一応は、それを説明するのは少し面倒ですが」

「面倒ならいいが」

「いえ、多分あなたが聞きたいことを説明していくうちに出てくると思っています」

男に説明すること自体が面倒だとも聞こえなくはない台詞を残しやうと本題に入るミコット。

「まず、いくつか質問させて下さい。どこから説明していいのかこちらから計り兼ねていますので」

「こちらにどの程度の認識があるのかをまず調査か、妥当だな。一方的に情報を提示するのは好きでは無いが先行投資と思って割り切ろう」

「もうちょっと違う言い方もできそうな気もしますが、本格的に話が進んでいないので次に行きますね」

そう言って、非常に事務的に質問を重ねていくミコット。質問はあらかじめ考えていたのかもしれない。男も割り切って答えていく。途中、関係あるのか？と疑いたくなるようなものも挟みつつ約20前後の質問を消化する。すべての質問を終えると深いため息とともにミコットが机の上に突っ伏した。

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃないことがよく判りました。タヴさんは本当に何も知らないんですね」

「それだけ聞くと俺がどうしようもない馬鹿みたいに聞こえるな」

「馬鹿かどうかは知りませんが、どうしようもないことにかわりありません」

スパンと切り捨てて説明を続けるミコット。男のことは既にタヴと呼んでいる。

「簡単に言ってしまうと、ここはタヴさんがいた世界とは別の世界でイエソドと呼ばれています」

ミコットは投げやりな感じで明らかに搔い摘んだだけの答えを語る。本当に面倒さそうだ。

「何か今いろいろと省いただろ。しかし別の世界ときたか、信じられんな、普通は」

「そうですね、そんなに簡単に信じてくれるような人いませんよね」

「まあ、俺は信じているがな」

「…信じてる感じが微塵も伝わってこないんですが」

男、もといタヴも本来なら信じていなかっただろう。だがタヴには自分の身に起きた謎の怪奇現象という実体験がある。自らの体がゆっくりとスライスされていく様を見ているのだから、別の世界に召喚されたという在り来りなファンタジーも多少は信じられた。もともと、他人を完全に信用するほど純粹ではない。信じたのはあくまでも可能性があるかと判断しただけにすぎない。

「本当に信じてるって。ここ、イエソドでは俺のいた場所、地球をマルクトと呼んでる訳だろ」

「チキュウというのは初耳ですが、概ね正しいです。理解が早くて助かりました」

このまま信じているかどうかの押問答は無意味と判断してミコットも折れた。しかし、信じてくれたところでミコットの頭には一つの考えがよぎる。

「…随分冷静ですけど怒らないんですか？」

ミコットは考えてしまったことを思わず口に出してしまった。

「何を？」

その言葉に何を言っているんだという顔でタヴが首を傾げる。

「私が言うのもなんですがこちらの都合で無理やり引き込んだ訳で

すし」

ミコットは口にしてしまった手前補足をする。本当は聞くべきではないのかもしれないが恨まれたまま行動を共にはしたくない。そんな関係は危険すぎる。

「ああ、そういうことか。怒って欲しければ怒るが？」

「そういう性癖はありません」

納得した様子のタヴはどうでも良さに適当に返答した。あまりの適当さに真面目に聞いていたミコットは馬鹿馬鹿しく感じてしまう。

「俺はドSなんだがな、残念だ」

「ドS？」

「こっちでは使わない言葉か、要するに他人を痛めつけることに快感を覚える人間のことだ」

「………」

タヴの巫山戯た対応と聞きたくもない情報にミコットは不快なものを見るような目でタヴを見つめるが、むしろこのやり取りは内容に反して和やかでもあった。

「そんな顔するな。2割方冗談だ。そうだな取り敢えず逆上して復讐、とかはない。まあ、これが経験の少ないガキだったら周りのせいにして殺しに来るかもな」

これ以上からかい過ぎても可哀想かとタヴは真面目に答えることにしたらしい。

「それが普通だと思いますよ。呼び出したこっちが言うのもなんで

すが」

ミコットは少しふすくれた表情で答える。そんな彼女を見て、このちよつとした表情の変化が面白いから大抵の相手が彼女のことをかかってしまうのかもしれないとタヴは考えていた。

「確かにそうかもしれない。あんたらが悪くはあるだろう。そちらに責任がないとは言わない。だが同時にこちらに非がなかったとも言切れない」

タヴは一方的に呼び出した側が悪いとは言わなかった。

「まあ事故みたいなものだ。こういう状況で横暴だと怒るのは大抵被害者面だけして自身がそれを避ける努力をしなかった怠惰な奴らだ。生きていれば避けられないこともあるが、避けられたのに避けなかったことについてののも案外多い。受け入れなくちゃならないことについてののは意外に多いんだよ。今回の場合も俺に知識があれば避けられた可能性もある。あくまでも可能性の話でしかないが、今どうであったかを断定するのは早計だ。情報も少ない。それで一々腹を立てていたら精神こころがもたないぞ。何より疲れるしな」

鼻で笑うように言い捨てるタヴ。生きていることで遭遇する不条理というのは多かれ少なかれ存在する。タヴは今回の件ですらその程度のことでしかないと言切ったのだ。

「随分達観した考えですね。お年寄りみたいです」

予想していたよりも大人な解答にミコットは虚を衝かれた感覚だ。そのせいか搾り出した言葉はどこか皮肉っぽいものになってしまっている。

「うるせえ。これでもピチピチの二十代だ」

タヴは自らの頬を摘んでまだ十分に張りがあるだろうとでも言いたげにぷにぷにと弄ってみせる。実際、肌は綺麗なようだがいい年をした男がやるとどこか苛立ちを覚える。というかウザイ。何となくタヴの行動に慣れてきたのでミコットは軽く流すことにした。

「でも異世界ですよ。事故と同列視というのも」

「異世界ねえ：ミコットだったか、お嬢ちゃんにとっての世界ってなんだ？」

「私にとっての…世界？」

唐突な質問にミコットは僅かに戸惑いを見せる。そんな少女にタヴは子供に話すような感覚で補足を入れる。

「今までいた世界とは違う世界、そう言われていったい何を考える？と聞いた方がいいか。要するにお嬢ちゃんの異世界に対する感覚だな」

「未知の場所ですから、いきなり連れてこられたらやはり不安とかが先に立つと思いますけど」

ミコットは自身が異世界に連れてこられたらどう感じるかを率直に答えた。そして、それは一つの正解でもある。

「確かに、そういう感覚が一般的だろう。だが一方で体験したこともない文化や出会いに胸を躍らせる（馬鹿）者もいるかもしれない。まあ、人それぞれ様々だ」

タヴは少女の答えが唯一の正解ではないと、当たり前のことを確認

させる。そして続けた。

「しかし、そもそも世界とは何処から何処までが世界なんだ」

ミコットはその言葉に今度こそ本当に虚を衝かれた。そんなミコットの反応を尻目にタヴは尚続ける。

「イエソドだったか、お嬢ちゃんの言う世界はそのイエソド全てのことだろうな。でもお嬢ちゃんはその全てを把握してるわけじゃないだろ」

「それはそうですよ。行ったことのない所の方が多いです」

ミコットにとっての世界は、大きくはイエソドと言えるだろう。だがその全てを知ることなどは不可能だ。それは改めて言わずとも当たり前のことでしかない。

「でも行ったことがない場所であっても世界の枠組みには入ってる。その未知の部分は異世界とどれほど違う？」

「それは…」

ミコットには答えられなかった。黙り込んでしまうミコットに純粋に好感を抱きながらタヴはミコットの代わりに口を開く。

「案外、人にとっての世界ってのは小さいものだ。自分の生まれた国から出たことのない人も多く存在する。そういった人達にとって世界なんていう枠組みは所詮自らの持つコミュニケーション程度の小さなものでしかない。異なる文化圏に行けばそこが既に異なる世界、文字通り異世界だ。一方でその異世界を認識することができれば、そこも自らの世界となりうる。世界という枠組みなどどうしようもなく不安定で限りなく適当なものでしかない。人間というのは酷く自

分本位な生き物なのだ。全てを人間中心に決定してしまう」

ミコットが答えた異世界に対する考えは概ね正しい。だが、それとまったく同じことなどミコットの世界にはいくらでも存在しているのだ。ただそれに気づいていないだけでしかない。

「確かにそう言われると世界なんてものは主観的なものでしかないですね」

ミコットは何か言いくるめられたような、騙されたような、化かされたような不思議な感覚に納得してしまうしかなかった。そして最後に畳み掛けられる。

「今、俺が体験している世界は異世界なのだろうな。しかし、実在している時点でそれは世界だ。俺が認識していなかったに過ぎない。今までの世界と異なるといっても忌避する理由にはならないし、連れてこられたからと言って怒り狂う程のことじゃない。常識や文化の違いはあるだろうが、国単位でさえ小さな違いは無数に存在する。当たり前のことだ。人は自ら無駄な枠組みを創り、異なるものを嫌悪する。自らの世界を狭めているだけだっていうのにな」

男は人より少し多くの世界を知っていた。そのせいだろうか、実際に異世界だと言われたところで何の心配も感じなかった。それこそ認識が広がっただけに過ぎない。いつも通りに行動するだけだと考えていた。この時点でここは彼にとってこの世界は異世界でも何でもなかったのかもしれない。

「結局、知らない外国にいきなり連れてこられた程度感覚しかないってことだな」

考えてみれば大したことはない。くぐってきた修羅場の数が違うのだとしても言いたげにタヴは笑ってみせる。

「……………」

「ん？ どうかしたか」

一連の会話を終えて黙ってしまったミコット。何かを考えこんでいる様子だ。

「もしかして気を使ってくれてます？」

「ふっ、かもな」

タヴは肯定するでも否定するでもなく、ただはぐらかす。もしかしたらタヴ自信にも何故こんな話をしたのか分かっていないのかもしれない。その気になれば一言で済みますこともできたと言うのに。

「で、話は変わるがどうやってその異世界とやらに俺を連れてきたんだ？」

タヴは不自然にならない程度に話題を変えた。この話はここまでにしようと、言葉にせずにミコットに伝える。ミコットもそれを察してか聞かれたことに自然に答える。

「召喚関連の大魔術です。私も召喚術の知識は乏しいので詳しくは説明できませんが」

「魔術ねえ。まあ来るとは思っていたが一応聞いておくか。何なんだそれは？」

「一々引っかかりますが、こちらは一応対応します。ところでマルクトには魔術の概念がないんですか？」

「概念はあるな、一般的には超常的な事象を何らかの行為によって

実現しようとする手段。あくまでも儀式的なものであって現実世界に干渉できるような実利的な効果はない精神的な活動といった認識か」

タヴは偉く捻くれた魔術の概念を語る。間違っていないが夢がない。嫌な大人の考えだ。

「こちらで言う魔法と一括りになってる感じですかね」

「魔術と魔法は違うのか」

タヴは魔術や魔法といったオカルトにちゃんとした定義があるらしいことに驚きを感じる。

「全く違います。魔術は理論的に構築された技術ですね。対して魔法は現実を起こり得ない空想、人の理り超えたるモノです」

「なるほど、体型的に確立されてる訳か、こちらで言う魔術がどういうものを言うかはわからないが現象が理解され法則が導かれているならそれは一つの技術とっていいな。その技術を使って俺を連れてきたのか」

「そうです。私の主がパスをつなげてここに召喚しました」

「パス？」

「経路とかつながりと言う意味です。道を作ったと考えて下さい。普通はイエソドからマルクトへの道なんですが、無理やり逆方向の道を作ったんですよ」

タヴは無理やりという言葉からして自分のいた世界からイエソドに来るのは大変なのだろうと類推する。もっとも、無理やり呼ばれた本人としては知ったことでもない。

「そのパスの名前がタヴなんです」

「そこを通って来たからタヴと名付けてくれたのか、安直だな」

安直で悪かったですねと拗ねるミコット、嫌なら名を名乗れと言わんばかりに睨みつけている。

「で、セフィリアといったか、お嬢ちゃんのご主人様は」

「よく覚えてましたね。すっかり流されたと思ってましたよ」

「こちらにとっては貴重な情報だからな。それでそのご主人様は今いま何処に？」

自分を呼び出した張本人は何故一番に顔を出さないのかと遠まわしに聞いたつもりであったが、どうやらあまり聞いて欲しくないことであつたらしい。目に見えてミコットの表情が暗くなっている。

「そうですよね。これが当然の流れです」

「都合が悪いなら後でも構わないぞ、留守か」

「今もこの屋敷内にいます。けど対応できる状態ではないんです。

セフィリア様の行なった大魔術はとても規模の大きなものです。最高位の術師が100人がかりで執り行うほどのものになります」

「この屋敷にそれ程人の気配はしないと思っていたが」

「セフィリア様一人で行使しました。無謀にもたった一人で。その代償として傷を負い、今も床に伏せています」

どこまでも真剣な顔のミコット。危ない状況なのかもしれない。そしてまたしても人の命を犠牲にして生き延びていた事実、タヴはどうしようもなく遣る瀬無い気持ちになっていた。

（自分の預り知らぬ所とはいえ、齒痒いものだな）

セフィリアというミコットの主人が床に伏せているのはタヴのせい

では無い。むしろ自業自得の部類に入るだろう。どれほどの理由があったかは判らないが、タヴが氣に病む必要は無い事柄だ。しかし、同時に命を救われたのも事実。女との戦闘時にセフィリアの魔術が横槍を入れなければ殺されていただろうし、生き残れていたとしても既に死に体であった。放って置けばそのまま死んだか自称魔弾に止めを刺されている。考え方によっては二度命を救われたことになるのだ。

「目覚める気配は」

「ありません。もう三日、目を覚ましません。傷は治したんですが、魔力を通り越して根本的な生命力まで消費しているようなんです。現状、手の打ち用がなくて」

魔力や生命力など気になる言葉が出てきたが理解したところで無駄であろうとタヴは流すことにした。そんなことよりも対応策を考えるのが先決だろう。

「医者とは？」

「事情が有りまして、連れていけない状況です」

そういえば仮にも王族だったのかと思いタヴは言及することを避ける。

「薬とかは無いのか？」

「ここにはありません。手に入れるにしても私がここを離れる訳にはいかないので」

「ここには無いってことは、別の場所にはあるんだな」

「それは…」

タヴはそれを聞いて胸の前で手を組み何かを考えている様子を示す。

あくまでも考えているポーズを演じているのだろう。考えるまでもなく結論はでていたのだから。

「俺が行こう。礼もしたいしな。場所を教えてください」

ミコットの答えを待たずにタヴが告げる。

「お礼、ですか？」

「まあ、こっちの都合だ。気にするな」

召喚される前に殺し合いをしていたなどは説明しない。説明したところでミコットを怖がらせるだけだろう。加えて深く説明すれば、本来召喚したかったであろう人物をその手で殺したことも説明しなければならぬ。幸い左腕が別人のものだとも気づかれていない様なので隠し通せる。目が左右で違うことは誤魔化しても腕は無理があつただろう。後に話さなくてはいいかもしれないが、それは今ではない。

「なんにしても、お客様にそんなことさせられません。という以前にこの世界の一般常識が無い貴方を一人で行かせるのに抵抗があります」

「それについては大丈夫だ。職業柄知らない世界は慣れている」

「職業？」

「こう見えても潜入工作のプロフェッショナルだからな」

自信満々に答えるタヴ。正確には殺し屋なのだが、工作員というのも間違えではない。ミコットへの配慮もあるだろう。それを聞いてどうやらとんでもない人物を呼び出してしまったとミコットは頭を抱えた。

第三項

タヴは最後のケーキを食べ終わると、カップに残ったお茶を一気に飲み干した。柔和な笑みを見せながら美味しかったと声をかけるが、味わっていたようには到底見えはしない。彼にとっては結局のところただのカロリー摂取に過ぎなかったのだろう。美味いに越したことはないが不味くても一向に構わないといった様子だ。

「さて、準備でもするか」

「本当に行くんですか？」

準備とはもちろん菓を調達するための準備のことだ。行くとはいっても身一つで出発する訳にはいかない。タヴはこの世界の現金を持っていなければ、地理も分からない状況だ。言語は通じているが、文字が読めるとも限らない。この世界の一般常識は言わずもがな。一般人であれば些かハードルが高いと言えるだろう。もっとも、自称作業員というぐらいであるから大した心配は必要ないかもしれない。

「お嬢ちゃんはいけないんだろ」

「お嬢ちゃんはいいい加減に止めてください。ミコットでいいです。」

ユードさんが戻ってくれば頼めるんですけど何時帰って来るか判りませんし」

「ユード？」

初めて出てきた名に疑問を示すタヴ。どうもこの少女は自分を基準にして会話を進めてしまう起来があるようだ。

「ああ、さつき話に出た執事長のことです」

「ケーキを作った人か」

「ええ、甘党のお爺さんです」

二人の会話の中でケーキの人として定着されつつある執事長ことユード老。タヴの中でのメージもあらぬ方向へ進行しているかもしれない。

「他には誰もいないのか？」

「いないんですよ。ユードさんは大切なお役目中ですし、セフィリア様は寝込んでますし」

「お姫様なんだろ、国の重要人物に対して二人しか付いていないというのは如何なものかと思うが」

ミコットはセフィリアのことを第四王女と言っていた。少なくともこの程度の人数で行動するような身分ではないだろう。お忍びであるとしても護衛が老人と少女だけとは考えにくい。加えて老人は不在ときている。明らかに異常事態だ。

無謀な魔術まで行使して傷を負わなくてはいけない状況とは如何なるものか、とも考えてみるがタヴには魔術の知識がないのでどれほどの大事なのか検討もつかない。結局、ミコットに聞くしかないのだが、当の本人は難しい顔をして黙ってしまっている。

「タヴさん」

覚悟を決めたかのような顔をしてタヴに話しかけるミコット。タヴは黙って少女の言葉に耳を傾ける。

「まだ少ししかお話していませんが、貴方は信用できる人だと感じ

ました」

その一言にほんの一瞬、僅かにタヴが顔をしかめた。自分のことを信用できる人物だと言ってくれるのは単純に嬉しい。だが警戒心が薄すぎるミコットに対して多少なり危うさを感じたのだ。タヴは自分のことを信用出来るほどの人間だとは思っていない。むしろ信用してはならない部類の人間だと自負している。

「猫を被ってるだけかもしれないぞ」

はぐらかすように多少の探りを入れる。ミコットが何を基準に自分を信用したのか、その一端でも確かめられれがと思つての一言だ。

「それを加味しても十分に会話の通じる相手だと思います。マルクトから来たばかりとは思えないほどに話が通じていますし、冷静に状況を分析しています」

「照れるな」

答えは相変わらずの軽口であるが、頭の中はミコットの言うように冷静に状況を見ている。今もミコットの発言を分析中だ。それなりによく見ていると関心するタヴ、しかし、あくまでもそれなりではない。タヴに言わせれば冷静に状況を分析できるような奴ほど信用してはならない人間だ。そんな人間ほど腹の底で何を考えているか判らない。そう、まさに自分のように。

「確かに人をおちよくった様な発言や回りくどい言い回しなど性格の悪さが所々滲み出ていますが、それなりに許容できる範囲のものです。あくまでもそれなりに」

「流れに任せて言いたい放題だな」

そんな人間は信用できないだろうと、タヴは心の中でほくそ笑む。このままからかってもいいが、真面目顔の少女をこれ以上虐めるのはさすがに趣味が悪い。タヴはこのまま話に乗ることにした。

「それで、俺が多少なり信用できる人格者だとして、今のミコットさん達の状況を伝えても差し当たり問題はないと」

「話が早くて助かります。あとミコットと、呼び捨てで構いません」

お嬢ちゃんではなくなったもののさん付が気に入らなかったらしい。子供扱いが嫌いなようだが、持ち上げられるのも慣れていないようだ。

「まあ、こちらとしても知っておきたいことだしな。予想はつく」

実際、ミコット達の状況については一番に聞いておきたかったことかもしれない。しかし、タヴはあえて聞かないように務めていた。聞いても本当のことを話してくれるとは限らないし、他人の事情に無遠慮に踏み込むほど無礼でもお節介でもない。

「そこまでの認識があればお話しても最悪の状況にはなりませんね」「最悪？」

安心した様子のミコット。タヴには何のことだかさっぱりである。しかし、次の瞬間空気が一変した。

「今の私達の状況をお話して、貴方がセフィリア様に仇を成す様なことがあれば私は貴方を殺さなくてはなりません。セフィリア様が命をかけて呼び出した方とはいえ、外敵となるならば排除します」

その言葉には少女が発したのとは思えないほどの圧があった。本当

に殺されかねないという錯覚を覚えるほどに。タヴが幾度となく感じたことのある戦場での殺意や殺気に近いものだが、明らかにそれとは違う異質な何かがミコットからは感じられる。どうやらタヴもミコットのことをまだまだ見誤っていたようだ。不容易なことをすれば殺されるかもしれない。タヴのことを殺せる実力があるかは別として、少女にはそれだけの覚悟がある。本当にタヴがセフィリアに手をだそうとすればミコットは迷わずその命を捨てる覚悟があるのだろう。

全ては話を進めるための前置きでしかなく、自分はまだ信用などされていらないらしいと改めて認識するタヴ。彼はミコットに対する評価を一段階上げることにした。その顔にはどこか嬉しそうな笑みが溢れている。

「構わんさ。君みたいな可愛らしいお嬢ちゃんに殺されるなら悪くない」

「笑いながら恥ずかしい台詞を吐かないで下さい。本気ならまだしも口先だけなのが丸判りです。あとお嬢ちゃんは止めてくださいといったはずです。怒りますよ」

それ程口先だけのつもりではなかったのだが、笑みが別の意味で捉えられてしまったらしい。頬を赤く染めているのでもしかしたら照れ隠しかもしれないが、いちいち言及することでもないだろうとタヴも話を合わせる。

「悪い悪い。なんだか無性にからかいたくなるんだ。そういうオラが出てるんだよ」

「真剣な話をしてる時にでふざけないでくださいよ。あなたの命がかかってるんですよ。一応」

「一応で殺されてもなあ」

「危なそうなら一応でも殺しますよ」

物騒な物言いも楽しげに聞こえるのはこの二人の人徳か、はたまた人の命を本当にその程度としか思っていないのか。何にしても両者ともまともな人生はおくっていないようだ。

「でもいいのか？ 作業員とか名乗った男を信用して」

「その言葉を何処まで信用するかは別として作業員というなら荒事に多少慣れてるでしょうから逆に話しやすいです」

「荒事なのか？」

「それはもう、随分な荒事です」

本格的に厄介事に巻き込まれそうな空気が濃くなっている。タヴとしても既に厄介事に片足を突っ込んでいるのは自覚済みなので構わないのだが、実際荒事は避けたかった。身一つでイエソドに来ている手前、どれほどの装備が調達出来るかもわからない。腕節に自信がない訳ではないのだろうが、最悪ナイフ等の刃物のみで行動することになるかと思うと頭も痛くはなる。しかも、魔術というオカルトが存在する世界だ。果たして自分が戦力になるのかと考えると、タヴにとってもミコットにとっても対して利益がない様に思える。

「何を隠そうこの俺は善良な一般人で」

一応はぐらかしてみるタヴ。無論ミコットは聞いてくれない。

「もう遅いですよ。仮に一般人でも善良ではないでしょうし」

「実は記憶喪失という設定が」

この流れなら蒸し返さなければ失礼とばかりについでに続けてはぐらかすが

「話を蒸し返さないでください。ってか今設定で言っちゃいましたよね！」

ついには大声で怒られる成人男性。それも見た目小中学生（実年齢十七歳）の少女にだ。余りに格好のつかない光景である。

「良く全部拾えるなあ」

「拾わせるな！」

最後まで口の減らないタヴにたいして、クワツと大きく口を開き威嚇の姿勢を取るミコット。小動物が毛を逆立てたような少女の威嚇は、もしかしたら場を和ませるために自ら体を張ってのことなのかもしれないともタヴには思えた。

「まあ、取り敢えず当面は敵になるつもりはない。頼れる人間もミコットだけだしな。結構頼りにしてるんだ」

「本当ですか？」

ミコットは少し照れたような素振りを見せ答えを返すが、逆立てた毛がまだ収まっていないらしい。なんとも言えない表情をしている。

「ああ、まだ少ししか話していないがミコットは信用できる人間だと感じている」

「まあ、私は信用に値する人間ですからね」

何故か自信満々のミコット。

「そこは強気なんだな」

「周りに変な人しかしないと自分の善良性を嫌でも確認することに

なるんですよ」

「苦勞してそうだもんな」

本当に苦勞していそうなミコットに本心から言葉を掛けているが、タヴ自身がその『変な人』の一員に成りつつあることに気づいていない。

「まずは、そう、地図があった方がいいですね」

そう言って立ち上がると、部屋の角に設置してある戸棚から古めかしい羊皮紙の巻物を取り出す。随分と焼けており遠目でも年代物とわかる代物だ。戸棚には製本された通常の本も並べられているので紙が普及していない訳ではない。たまたま近くにあった地図がそれだけだったのだろう。

「お待ちせしました」

手にした羊皮紙を机いっぱいに広げるミコット。危うくお気に入りティーセットを落としそうになるが気を利かせたタヴが台車に移し事なきを得た。広げられた地図には大きく分けて四つの大陸が示されており、当たり前であるがどう見ても地球の世界地図ではない。改めてここが地球ではないと再確認するタヴ。これが悪戯であれば相当手の込んだものであろう。

「端的に言うと、この国、メレク王国の王都は占領されている状況にあります」

「一気に聞く気がなくなってきたな」

荒事とは聞いていたが、よもや一国の一大事とは思わなかった。これが単なる小国であればまだ救いがあったかもしれないがミコット

が指したのは中央にある一番大きな大陸だ。

「メレク王国は大陸の西岸部から中央にかけてこの位置にあります」
「…広いな」

本当に広い。文字がわからなかったため地図の四九尺がどの程度のものなのか検討もつかないが、間違いなくこの世界有数の国家だと判る広さだ。

「はい、そして国境を堺に二つの国と隣接しています。北側にあるのがアドナイ、南東側がエロヒムという国です。アドナイとは国境付近で常に小競り合いが続いていました。エロヒムとは協定を結び割合友好な関係にあります」

これ程の面積を占めながらも隣接する国がたったの二つしかない。加えて二国とも大国と言える大きさだ。メレク、アドナイ、エロヒムの三ヶ国で大陸の殆どが占められている。このうちの一国が落ちたとなれば面倒なことになっているだろう。

「それで、何処にやられたんだ？」

「いえ、やられたというか戦争自体起こっていません。開戦していなければ宣戦布告すらありません。そもそも正面からメレク王国と戦っても勝てる国はありません」

「言い切るな。随分と強気なことだ。となると内乱か、そういう奴らの鎮圧は役に立てないと思うぞ」

「内乱程度なら自分たちでどうにか出来ます。大体この国はそれ程治安は悪くないですし、諸外国にくらべても生活水準は高いです。大きなリスクを背負ってまで反乱を起こす人達はそれ程いません」
「少しはいるんだな」

ミコット否定はするが一向に答えを述べようとはしなかった。それに痺れを切らしたのかタヴは直接回答を求める。

「誰が国一つ落としたのかハッキリしろ、会話を始めたのはそっちだろ」

「わかりません」

「おい」

思わずツツコミを入れてしまうタヴ。一国が落とされて相手が判らない、などということがあるのだろうか。セフィリアが三日間目を覚ましていないのだから、占領からは少なくともそれ以上は経過しているはずだ。その間に何らかの声明が出ていてしかるべきである。

「本当にわからないんです。けど、その一国の首都を一晩で落とすだけの手練達だということだけはわかります。相当な手際でした。長い時間をかけて入念に計画を立てたんでしょう。王国上層部に手引きしていた者ものもいたかもしれません」

「一晩。冗談だろ」

更に信じられない状況が飛び出す。この国のセキュリティを疑いたくなる一言だ。国の警備がよほどの策だったか、敵が想像もつかないほどの手勢だったか、幾らなんでも異常である。

「冗談ではありません。証人は三人しかいませんが」

「ミコットとお姫様、それに執事長だけってことか」

「はい」

なんとも説得力のない面子だが、事実であれば一国の王女が命をかけるぐらいはするかも知れないとタヴはある意味で納得する。

「他の者たちは？王族は他にいるんだろ」

「おそらくもう死んでいます。城内にいた王族、陛下と姫様の姉君と弟君達が殺されるところはこの目で確認しました」

平然と答えるミコット。どうやらこの少女に対して荒事で気を使う必要はなさそうだ。

「皆殺しか。そんなことしてなんの旨みもないだろうに。今頃国中大騒ぎじゃないのか」

君主が殺されれば騒ぎの一つも起きるだろう。しかし、またしても予想が裏切られる。

「いえ、生きているみたいなんです」

「今死んだっていったら」

一転して真逆の主張をするミコット。普通なら何を言っているんだと一蹴してしまうところだが、タヴは酷く嫌な感じを思い出す。

「はい、死んだはずの人間が何事も無かったように国を動かしているんです」

その一言に僅かに汗が流れ落ちる。ミコットは気付かない。気付いたとしてもその理由を知りはしない。死んだと思っていた人間が生きているという現実。ついさっき、まさにタヴが体験していたことと重なっていた。彼の生きている業界では珍しいことではないが、続けざまに起こるようなことでもない。

(…偶然か?)

表情や言葉には出さないが、内心かなりの動揺があることにタヴ自身驚いていた。それでもミコットにはその素振りを一切見せない。

「偽物か、もしくは傀儡にされたか」

「おそろく」

生きているというよりは、代わりがいると判断したのだろう。仮に生存者がいたとしても、操られているか逆らえない状態にあるかもしれない。全てが殺された者たちの虚偽だという可能性もあるが、タヴは敢えてそれを口にはしない。身内の前で話す話ではないという心遣いだ。もっとも、そういった可能性を排除した訳でもない。あくまでも口にしなかっただけである。

「王都占領から十日たちましたが何の混乱もありません。誰も気づいていないんです。私たち以外は」

ここで、占領からの期間が確認できた。かなりの時間が経過していることにタヴは多少の苛立ちを覚える。訳の判らない敵に対して時間を与えすぎるのは上手くない。一方、よく三人で十日間捕まらなかったものだとも感心する。思った以上に目の前の少女は優秀なのかもしれない。

「あんたが嘘を付いている、もしくは間違えているという可能性は」
タヴ自身ミコットが嘘を付いているとは考えていないが、勘違いということもある。ここで曖昧な返事をされても困るのだが、一応、形式的に聞いておく。

「ありません。あくまで私の主観になりますけど。信じてもらえるかはタヴさんしだいです。信じてもらえなければタヴさんが私たち

の敵になるだけですから」

力強く、はっきりと言い切るミコット。敵味方の判断は相変わらず極端だ。返答を間違えれば本当に殺されるかもしれない。

「極端だな。何故そうなる」

「セフィリア様と私は追われています。セフィリア様は偽物として、私はその偽物を手引きした賊として懸賞金がかけられています」

敵側もミコットたちのことを気にしているらしい。タヴは本当によく捕まらなかったと再度感心する。そしてミコットの言葉にうなずきながら言葉を返した。

「なるほど、あんたらを差し出せば良い金になり、上手くすれば国との接点も作れると」

「少なくとも見逃すことはないでしょう」

当たり前と言わんばかりに結論づけるミコット。本当に短い付き合いだというのにタヴの性格の一端を理解しているようだ。この状況でタヴがミコット達を見捨てるのであれば、タヴもまたミコット達を始末するつもりだった。余計な怨恨を残して後で苦労するぐらいなら、今のうちに始末を付けたほうが後腐れはない。その始末に金と人脈が付いてくるのならタヴは迷わずミコット達を差し出していただろう。始末を失敗すれば先日女ののように復讐に来るかもしれないが、あれはあれでイレギュラーな事例である。ある意味でこの二人は似ているのだ。根底の部分で冷たい決断をいとも簡単にやれてしまう。だからこそミコットもタヴの考えに気づいていたのかもしれない。

「短い付き合いなのによくわかってるじゃないか」

本当に見透かされてしまいそうだと、タヴは警戒心を多少引き上げた。こんな少女が自分とまともに話し合えていること自体が異様なことだが、不思議と違和感を感じない。自制しなければ余計なことまで口走ってしまいそうだ。

「信じてくれますか？」

少し身を乗り出して上目遣いで見つめるミコット。目は何故か潤んでいる。ここにきて容姿によるアピールも組み込んできた。そんな仕草を誰に仕込まれたんだろうかと思いつつもタヴは華麗にスルーする。並み神経を持った男であつたらここで撃沈されていたかもしれないが、タヴに効果はなかった。実は警戒心を高めていなければ落とされていたかもしれないことは、彼の心の中にそつとしまっておくことにする。

「そう急ぐな、まだ聞きたいことがある。そうだな、執事長は手配されていないのか？」

少し動揺しながらも、タヴはすかさず話題を変える。小さく「チツ」と舌打ちが聞こえたのは気のせいではあるまい。

「ユードさんはお年でしたので退職してたんですよ。占領される二日前に」

「本当に老人なんだな。何で一緒にいるんだ」

タヴも執事長が定年退職するほどの老人とは思っていなかったらしい。少女と王女と老人という異様なパーティーに呆れている。

「姫様にせがまれて甘いものを持って来てたんですよ」

「それで巻き込まれたのか、運がないな」

黙って隠居していればいいものをと、運の無い老人に労わり気持ちを送る。だが逃げ延びた三人の内の一人と考えればある意味で運はいいのかもしれない。

「そうでもないです。手続きが面倒だからって王族用の抜け道を勝手に使って忍び込んでいましたから、加えて昔の血が騒ぐとかいつてノリノリなんですよ」

「記録上いないことになってるのか。元気な爺さんなんだな」

「昔、傭兵だったらしいです」

最後まで話を聞くとますます訳の判らない老人象が構築されてしまったタヴ。彼の頭の中には戦場にお菓子袋を持参する紳士な小太りハッスル老兵しか浮かんでいない。ある意味では是非あってみたいが、そんな奴は絶対にいないだろう。

「最後に一つ、何故隣国について説明した。この二国はここまでの話で関係ないと思うが」

タヴは最後に聞きたくはないが聞いておかねばならない質問をした。敢えて二国について話したのだから何らかの形で関与しているのだろうと予想はつく。その上絶対にいい方向では無いという想像も外れはしまい。

「この十日でユードさんに色々調べてもらったんです。昔の傭兵仲間の伝だそうなんですけど」

執事長には諜報能力もあるらしい。もっともタヴの中ではイメージがアレな感じに固まってしまっているので実感は全く湧いてこない。

「その二国に怪しい所でもあったのか」

「エロヒムは今のメレク王国と全く同じ状況にある可能性が出てきました。アドナイは判りませんが、やるなら同時にやるでしょう。不思議と国境付近での小競り合いも占領と同時に沈静化しましたから」

大陸を大きく占める三ヶ国がある者達の手に落ちているかもしれないという状況はタヴの背筋に寒いものを感じさせた。彼自身国の方向を左右するような仕事をしたことはない。それに近いことがあったとしても間接的なものだ。国からの依頼を受けたこともあるがテロリストの始末程度であるし、基本一人で動いているので大規模な仕事に参加することもない。その他の殆どの依頼は個人か特定組織からのものである。今更ながらとんでもない事に巻き込まれてしまったとタヴは軽く後悔する。もう逃げることは叶わないだろう。

「裏から大陸一つを操るつもりか。大掛かりなことだ」

「明確な目的はなんとも言えません」

ここまで来ると一体何が目的なのかも判らない。だが決断しなければならぬ。目の前の少女に手を貸すのか、殺すのかのどちらかを選ばなくてはならない。

「状況は判った。それで、どうにかする為に呼び出されてのが俺、という訳か」

「はい」

「俺が加わったところで、どうにもできない気もするが」

一通りの納得はいった。荒唐無稽な不思議現象には目を瞑るとして、全ての情報を頭の中で確認し直す。

「俺向きの案件であるのは確かだ。誰が手引きしたんだかな」

改めて考えると敢えて自分を指名したような案件ではある。少なくともあいつよりは適任だろうと思いつながら、タヴは静かにミコットの目を見つめた。

「何か気になる点でも」

酷く情熱的な眼差しで見つめられたミコットは、何か不振な点でもあったのかと自分の説明を思い返していた。おどけた顔は年相応に可愛らしい。実年齢は十七歳ではあるがこの際それは忘れよう。

「気になる点は多々あるが今はいい。全面的に信用する。協力しよう」

スパッと一言で承諾できないのはタヴの性格のなせる技か、そんな締めりのない答えでもミコットにとっては吉報である。

「本当ですか！」

パアッと顔が明るくなるミコット。今までの緊張した雰囲気は一瞬で払拭され、話を始めた時のお茶会モードに入っている。お茶飲みますか？と訪ねてきて勝手に手にお茶を煎れ出す始末だ。そんな浮かれ調子のミコットを見てタヴが呆れ口調で話を進める。

「ただし条件がある」

「私にできることなら！」

今ならば何を言っても従いそうだが、そうするとまた話が脱線して

しまいそうだ。

「ああ、まずはある程度俺の指示に従うこと」

「ある程度でいいんですか？」

何でもやりますと言わんばかりの迫力に多少気圧されるタヴ。しかし、彼には大したことを要求するつもりはない。

「構わない。俺も間違えることはあるし、価値観が違うんだ。従えないこともあるだろう。その場合は妥協点を探ればいい。仮に引けないことがあるならそれに従って動くのも構わない。それで死んでもそいつの判断だからな」

「自分の行動の責任は自分で持てってことですな」

浮かれていてもタヴの言いたいことを直ぐに察するあたり優秀であるが、その内容が酷く冷たいものだとは気づいていない。自分の責任を自分で持つという重みまでは理解出来ていないのだろう。理解していたとしてもそれはタヴの言わんとすることは別の意味のものである。

「そういうことだ。それとこれは契約だ。俺の一方的な善意じゃない。ミコットたちが依頼主で相応の報酬はもらう」

これには大きな意味がある。契約関係になると言えば聞こえはいいが、つまりは共犯者としての契約を結ぶということだ。これから行うのは正義のための戦いではない。表向きは国を救うための戦いでも、タヴがやることは人殺しでしかない。これは彼が人を殺すための契約であり、ミコット達が彼に人を殺させるための契約だ。それにいつまでもお客様扱いでは居心地が悪い。

「わかりました。当然といえば当然ですね。報酬としてお望みのものはありますか？王都が取り戻せればある程度の融通は効くはずですが…」

契約を結ぶことが本題なので報酬については考えていなかった。この国の相場も分かりはしない。少し考えて面倒になったのかタヴは適当にはぐらかす。

「それはお姫様が起きてからだな。今は契約だと云うことを覚えていてくれればいい」

「はい」

「よし、契約成立だ。早速だがいくつか指示がある」

ここで小休止といきたいところではあるがそうもいかない。状況が判った以上は動かなくては死につながる。

「本当に早速ですね」

「薬は俺が取りに行く、執事長とやらが戻ってくるのを待つのは上手くない。面が割れているミコットが行くのも論外だ」

取り敢えずは薬の入手が最優先である。呼び出した張本人が起きなければ進む話も進みはしない。

「ですがお客様に行かせるのは」

まだ渋っているミコット。これはタヴの予想の範疇だ。

「俺はもうお客様じゃない。今さっき契約したばかりだろ」

直ぐ様契約の効果が現れた。共犯者となった今、互いに遠慮は無用

なのである。若いミコットには割り切れないかもしれないが、タヴも譲るつもりはない。

「あつ、確かにそうですけど、それとこれとは」

「関係ある。仮に今すぐ執事長が戻ってきてても、もう外には出すな。十日たっているんだろ？相手が手練ならこちらに協力者がいるのは既に判っているとした方がいい。なまじ最近まで城にいた人間なら尚更だ」

タヴは十日もあれば協力者である執事長を調べ上げるには十分であると判断したようだ。執事長の実力がどの程度のものかは不明だが楽観視しては足元をすくわれかねない。

「確かに：そうかもしれません：」

「ここはもう引き払った方がいいだろうな。俺がいない間に身支度も頼む」

この場所にどれ程の安全性があるのかは判らないが、ミコットの様子を見る限り逃げ出してからずっとここにいたのだろう。下手に動くのは危険かもしれないという考えもあるが、それ以上にここに長居してはいけなさとタヴの感が告げていた。

「どうしてもですか」

「嫌なら構わない。ここでじっとして追っ手が来るのを待てばいいし。俺は俺の判断でここから出ていくだけだ」

判断は飽くまでミコットに託しながらも、その内容は酷く冷たい。ここで死ぬか、タヴを信じて付いていくかの二択だ。タヴはミコットが自分を信用していないことに気づいている。タヴも同様にミコットを信用していないが、協力するという誠意は見せた。こんどは

ミコットがそれを見せる番だ。

「こっちに選択肢はないですね」

台詞こそあきらめ口調であるが、声はどこか弾んでいる。どうやらタヴの意図に気づいたらしい。

「話の判る相手で助かった。たまにいるんだよ、尽くいうこと効かないクライアントが」

「大変そうですね」

「そういう奴は全員死んだけどな」

私達は死にませんよと返すミコットは自分の選択が正しかったことを確信する。おそらくはここから、この人から反撃が始まるのだと半ば確信していた。

「この国の通貨を貰っていいか、それと最小限の常識と風習を教えてください」

「それはお安い御用です。むしろそのぐらいしないと行かせるのに不安が残ります。後は現在地と街の場所ですね。細かい地図もあったほうがいいですか？」

直ぐに合わせてきたミコットに多少の驚きを覚えながら、育てればかなり使えるようになりそうだとタヴはいらぬ企みを企てる。

「もちろんだ。何とか話さなくても察してくれるのは助かるな。今日会ったばかりとは思えないほどだ。気が合いそうだな」

「気が合うかは別として、やりやすいのは確かですね」

こうして絶対に気が合うであろう曲者二人が手を結ぶことになった。

周りにとっては甚だ迷惑なコンビになりそうであるが、本人たちはそれに全く気づいてはいない。

第四項

当面の行動が決定したと言っても、実際のところ準備には結構な時間を要することになる。まず、ミコットの提案でタヴの服装を整えることから始まった。これが意外に火がついてしまったらしく整えるというより改造に近い大騒ぎとなった（大騒ぎといって殆どが二人の漫才だが）。今まで話し合いをしていた一室に佇んでいる小奇麗な男は素性も判らぬ侵入者ではない、タヴ＝ルノアール（偽名）その人である。

「落ち着かないんだが」

非常に居心地の悪そうな顔をして、タヴはミコットへと不平を漏らす。首辺りまであった長めの黒髪は紐で結えられてしまった。細かい作業を行う時などはよく束ねていたらしく、それ程違和感を感じられない。前髪も適度にボリュームを持たせ左右に別けられているので以前より表情が確認しやすくなったが、それと引き換えに切れ長の鋭い眼光も顕になり以前とは別の迫力を可出している。顎に生えていた無精髭は綺麗に剃られてしまい、これだけで二、三歳は若く見えるだろうか。タヴ曰く、面倒だから処理していなかったらしい、ファッションでも何でもなかったのだ。その不摂生さについてミコットとの押問答が繰り返されたが、どうやったらこんなにも話が脱線するんだ？と思う辺りまで会話が飛び火した時点でミコットが折れて話が終了した。

その間ずっと話をしていただけでなく、タヴを改造するためにひたすら手を動かしていたので時間自体は無駄にしていない。一般常識の手解きも終えた。しかし、ミコットに於いては大きく精神力を消費、もとい無駄にしてしまったらしく、改造を終えて再び机の上に

突っ伏している。

「…大丈夫です。どこからどう見ても、上流階級のちよつといけ好かない性格の悪そうな次男坊辺にしか見えません」

力のない瞳でタヴを一別したミコットは、何故こんなものが出来上がってしまったのだろうと思ひながら正直な感想を正確に漏らしていた。

「言葉の節々どころか全体に悪意が散りばめられているな」

「見た目が変わっても、中身は変わらないんですね」

余計なお世話だと一蹴してタヴは改めて鏡を覗く。そこにはやはりよく見知った知らない人物が映っている。

服装はそれ程変わっていない。上着は先ほど借りた刺繍入の男物のシャツ、その上に鈍色のベストを羽織っている。ズボンは右大腿部に穴が空いていたので、似たような細身の黒いズボンを代わりを用意してもらった。足首までの黒いショートブーツは自前のものだ。

「上着は無いかな？」

「タブさんが着ていたやつみたいのですか？」

その言葉でミコットがコートを預かっていることを思い出す。そして何か大事なことを忘れていたのに気がついた。

「確かコートは預かっていると言ってたが」

「はい。コートと荷物は預かってますよ」

「…荷物？」

タヴは身一つでイエソドに来ていたと思い込んでいたが、召喚時の記憶が有るわけではない。どんな状況で現れたのかを知るのはミコットとセフィリアだけだ。

「俺は何か持っていたのか？」

「あ、そうですね。いくらタヴさんでも、あの状況で記憶は残っていませんよね」

どうやら何か持っていたらしいと考え、タヴは大した期待はしないで何を持っていたのかを尋ねる。

「その荷物はどんなものだ」

「銀色の大きなケースですよ。タヴさんのじゃないんですか？」

あっけらかんと答えるミコットだが、タヴにとってはそれどころでは無い。ミコットの言葉が事実ならば装備の補充ができるということである。これ以上はないというほどの吉報だ。

「今どこにある！」

タヴは急に精気が戻ったような顔をしてミコットに掴みかかった。ミコットは困惑を覚えながらも冷静に引きはがし落ち着くようにたしなめる。

「お、落ち着いて下さい！タヴさんが召喚された部屋に置いてあります。重くてとても一人では運べなかったのです」

その言葉を聞き、タヴは直ぐ様部屋を飛び出した。それを見てほうけるミコットは

「：場所、知ってましたっけ？」

と当然の疑問を呟いた。

タヴさんでもこんなに慌てることあるんだと続け、タヴの人間らしい一面を目の当たりにできて至極ご満悦である。

タヴが部屋の場所を聞きに戻ったのは10秒ほど後のことになる。



「ここです」

二人は長々と話していた部屋を後にし、召喚が行われた部屋の前まで足を運んでいた。階段を降りた突き当たり、少し影になった日当たりの悪そうな部屋だ。扉にはしっかりと鍵が取り付けられている。実に古めかしい大きな鍵穴だ。ミコットは鍵穴に合う大ぶりの鍵がついた鍵束を取り出し扉を開く。立て付けが悪いのか、ギィイと不快な音をたてながら可動する扉。その音は何処かに誘われてしまいそうな不安感を来訪者たちに浸透させる。

「埃っばいな」

あまり使われていなかったのか所々埃が溜まっている。日当たりも悪いのでジメジメしており非常に居心地が悪い。これならば物置としてでも使った方が無難であろう。

一方で、何故こんな部屋で召喚を行なったのだろうと疑問を持つが、

魔術的な理由があるのかと勝手に納得しておく。実は失敗して汚れても平気な部屋を使っただけなのだが、タヴがそのことを知るよしもない。部屋の中は埃っぽいことを除けばいたって普通だ。むしろ家具は少ない。使っていないかったのだから当然といえば当然だが、その簡素さが部屋の冷たさをより一層引き立てている。

「…これは」

預かっているという荷物を取りに来たのだが、それよりもまず目に入ったものがあつた。普通の人では気づかないよう床の染み、入念に拭き取ったのであろうがタヴには判った。埃もその部分だけくつきりと取り除かれている。あるいは染みの跡よりも血の臭いに気が付いたのかもしれない。この部屋には嫌な生臭さが漂っている。

「…拭き取ったんですが判りますか？」

どこか浮かない顔のミコット。主の血液が作った血溜まりを思い出して気分が良くなるものはいないだろう。

「よくこの出血で助かったな。運がいい」

タヴは染みの面積から大まかな出血量を予想する。特異なスキルではあるがとても自慢できる様なモノでもない。殺し損なった標的の生死を大まかに判断するために身に付けたモノだ。

「傷は直ぐに塞ぎましたから。それでも力及ばず、今に至るんですけどね…」

「傷を塞ぐ？魔術というやつか？」

手当ではなく、直接傷を塞いだ様な口ぶりをするミコット。ミコッ

トの魔術によるものなのだが、当然タヴには想像できない。

「便利なものだな。俺のいた場所での応急手当なら死んでいただろう。医療面ではこちらの方が遥かに優れているのかもしれないな」

感情なく述べているタヴだが、頭の中では面倒なことだと煩わしく思っていた。敵に致命傷を負わせたところで魔術による治療が優秀ならば殺しきれないことも多くなる。確実に殺したとしてもどの程度までの治療、いや、蘇生が可能なかは判らない。今まで以上に念入りに殺さなければ、死に損ないの復讐者が後を絶たないだろう。

タヴにとっても傷を直ぐに治せるというアドバンテージはあるが、それは考慮に入れていない。保険があると思いがら戦えばそれ自体が隙につながる。殺されても死なない、などと考えている時点で勝ちなどないのだ。命が一つだからこそ必死になって這いつくばって生きてこれたのだ。命のストックは人を弱くしてしまう。

「傷は治せても痛みは消えませんか、気を付けてくださいね」

魔術による治療の補足するミコット。当たり前に聞こえるが、その内容を考えてみればえげつない。痛みが継続しながらも体は動くのだ、それは戦い続けられるであろう体。そんなことが可能ならばそれは拷問でしかない。痛みを感じるといえるのは言わば体の発する危険信号。健康な体に危険信号が流れ続けていればどうなるか、考えてみたくもあるまい。そして最終的に体が死ぬ前に精神が死に至るだろう。

「それで、俺の荷物は何処だ？」

「そこに布を掛けて置いてあります。埃っばかったので」

そう言うとミコットは部屋の角に置いてあった布に近づき静かにその布を剥ぎ取った。大した動作はしていないのに辺り一面に埃が舞う。どうやらこの三日間で布の上にも埃が蓄積されていたようだ。コホコホッと咳き込むミコット。これは掃除をしていなかったミコットに非があるのであまり同情はできない。

布の下から出てきたのはタヴのよく見知った浅黒いコートと銀色の大型トランクケースだ。時間としてはそれほど経過していないのだが、タヴはなくした思い出の品を見つけたかのような感慨深い思いでコートを手にとった。このコートがなければ既に彼は事切れていただろう。感慨深くもなる。

「確かに俺のものだ」

タヴが着ていたコートであるから当たり前ではあるのだが、確認した意味も含めてミコットに伝えている。綺麗にたたまれていたコートをその場で広げる。またしても埃が舞うが気にはしない。目の前に広げたコートは不自然に左肩から先が切断されていてとても着れる状態ではなかった。そのありのまま状態が、改めて自分の左腕に起こった怪現象を物語っている。今更だがこの男の左肩に付いているのは彼の腕では無いのだ。

「最初からそんな状態でしたよ。私が切った訳じゃないですからね！」

まじまじとコートを見つめるタヴに自分が疑われているのかと思っただけ、ミコットは慌てて誤解を解こうとする。タヴ自信こうなつた理由を知っているので気にはしていない。

「ああ、これには身に覚えがあるから安心してくれ。ちょっと思い

入れがあるコートだったただけだ」

どのような思い入れがあるのかは判らないが、ただ身を守るためだけに着ていた訳ではないようだ。その理由がタヴの口から語られることがあるかは甚だ疑問である。

タヴはコートを一瞥すると、ポケットの膨らみを確かめる。そこには記憶にあった通りのものが収まっていた。取り出されたのはナイトブルーのストレート型携帯電話、戦いの真下コートに滑り込ましていた愛用品だ。

「何ですか？それ」

初めて見るのかミコットが身を乗り出してのぞき込む。それを見てタヴはイエソドには携帯はないらしいと判断する。期待もしていなかった。もっとも。似た機能を持った道具はあるかもしれない。

「携帯電話だ。と言っても判らないか、個人用の通信端末と言えば判るか？」

「ああ、マルクトにもあるんですね。イエソドのとはかなり形が違います」

どうやらイエソドにも通信端末はあるらしい。

「個人の通信端末があるなら執事長と連絡が取れるんじゃないのか？」

ふと思いついてタヴが質問するが、返って来た答えは期待したものではなかった。

「イエソドの通信具、リンクって言うんですけど、魔力を媒体にして個人のリンク同士をパスでつなぐ装置なんですよ。その際、パス全体を管理している機関が有りまして、個人の使用をチェックできるんです」

「使えば履歴が残るってことか」

「辿られれば場所も割り出されます」

どうやら地球で一般に使われている携帯電話と似たシステムが構築されているらしい。これでは迂闊に通信手段は使えない。管理下がないパスを使えるかどうか聞いてみるタヴだが、行うには高度な知識が必要になる上犯罪だという答えが帰ってきた。

「今更犯罪もないだろうが。まあ、仕方がないな。この件は保留だ」

必要があれば使うこともあるだろうとタヴは心に留めておく。その時、手に持った携帯電話

をいじっていると新規メールがあることに気がついた。三日放置していたが電源はギリギリ残っている。イエソドに来てから届く訳はないので携帯電話をコートにしまい召喚されるまでの短い間に届いたのだろう。

差出人 … 『ストーカー』

件名 … 『Re…本当の名前』

(…仲介屋か、返信?)

どうやら通話を切った時にはまだ存命だったらしい。その後どうなったかは判らないが今考えてどうなるものでもない。タヴは取り敢えずメールの確認をする。メールを開くと

※ロック※ パスワード…

という文字列が現れた。

「…パス付きか、面倒なことを」

それを聞いたミコットがマルクトにもパスがあるんですか？などとボケたこと言っているが無視をして思い当たる言葉を入れる。

（本当の名前…俺の本名か？）

最後に答えた自分の名前のことかと思い入力する。漢字ではないだろうと、平仮名、カタカナ、ローマ字で入力を行うが

（全く開かないな）

入力した結果は全て※パスワードが違います※だ。

（これは俺の名前じゃないな。仲介屋のか？）

残念ながらタヴは仲介屋の本名を知らない。知っていたとしても、それがパスワードとは限らない、早くも打つ手なしである。

（意味のないことをする奴じゃ無いと思ったが）

メールの中身は襲撃時の情報か何かだろうと予想する。それでも何故パスワードを登録したのか気になるが今はどうしようもない。差し迫って必要ではないのでこちらも保留にする。他に何もないかと確かめ、一通りチェックを終えると携帯電話の電源が丁度底をつい

た。

「充電しないとな」

残念なことにタヴはイエソドに来てから電気関連の製品を見ていない。そもそも存在しているか疑わしいし、あったとしても規格が合うことはないだろう。しかしトランクケースが無事であったのが幸いした。タヴはソーラーパネル式の充電器を常備している。いざという時に携帯電話が使えないと仕事上困るのだ。

「充電って電気式なんですか？」

無視をされて黙っていたミコットだが、タヴが言葉を発したのをきっかけに質問を再開する。

「イエソドでは電気じゃないのか？」

「こっちでは基本なんでも魔力で動かしますよ。昔は電気を研究していた人もいましたけど、エネルギー効率的に魔力の方が断然上なんですよ。一般生活に必要な分は個人でまかなえますし、お金もかからないので」

「聞けば聞くほど便利だな。確かに電気に代わる高効率エネルギーがあればそちらに移行する。費用もかからなければ尚更だ」

まだ多くを確認した訳ではないが、文明レベルはイエソドの方が上なのかもしれないとタヴは思案する。これでは本格的に役に立たない可能性も出てきた。

「後は、取り敢えず中身のチェックか」

トランクケースを開けようとダイヤルロックに手をかける。しかし、

タヴは不振な点に気づき顔を歪めた。閉じられたトランクケース、召喚にあう際はしっかりと鍵がかかっていた。今もそれは変わらない。しかし、ほんの僅かであるが金具が浮いている。衝撃で緩んだとも考えられるが、その可能性はタヴの感が否定する。

「ミコット、ここのダイヤル弄ったか？」

「弄ってませんよ？お客様の荷物に手を出すような不埒ものじゃありません」

プンプン頬を膨らませているミコットは再度置いておいてトランクケースを開く。その手つきは相変わらず慣れたものだ。

「何だ？」

開けてまず目に入ったのは一枚の紙切れ、そこには達筆というには些か殴り書きすぎる筆記体で「present for you from Tathlum」と綴ってあった。

（タスラム、魔弾の奴か）

タスラムというのはケルト神話に出てくる太陽の神ルーが投石に使ったとされる弾の名前である。「魔弾タスラム」「太陽弾」などと呼ばれる神話上の武器だ。単に魔弾が自分のことを示すために使ったのだろう。知らない人間には伝わらないことを全く考慮していない辺り、自称魔弾の詰めの甘さが感じられる。

「可愛い紙、タヴさんでもそういうの使うんですね」

何を言っているんだと訝しげにミコットを見るが、その目線は紙の裏側に向いていた。何が書いてあるのかと裏返してみれば、そこに

は子供向けアニメのキャラクターが絵描かれている。タヴはあまり詳しくないが自称魔弾の着ていたTシャツと同様のものなのだろう。これならば差出人が誰なのか一目瞭然だと納得する。こんな趣味の悪い便箋を持ち歩いている人間がそうそういる訳がない。

「俺個人の名誉のために言っておくが、このファンシーな紙は俺のものじゃない。知り合いからのメッセージだ」

こんな趣味を持っていると思われるのはたまらないと釘を刺しておく、当のミコットは「恥ずかしがらなくてもいいのに」などと呟いているので信じているかは謎だ。

「余計な借りができたな」

タヴは余計なことをと思いながらも、今回ばかりは助かったと感謝していた。あまり借りを作りたい相手ではないが、文句を言っていられる状況でもない。好意は有難く受け取っておく。

「中身は無事みたいだな」

そう言ってタヴはケースの中から一丁拳銃を取り出した。

「あまりデカイのを持って歩く訳にもいかないしな。9mmのストックは結構あったはずだが…」

「銃ですか？それ？さっきも構えてましたけど」

携帯電話を取り出した時とは違い知っている反応を見せるミコット。さっきというのはミコットがシャツを届けたときのことだ。

「こっちにも銃はあるのか？」

タヴは装備の補充が可能かもしれないと喜ぶ一方で、すぐに規格が合わないだろうと考直し、肩を落とす。

「ありますけど、かなり違う感じですよ」

知っている銃とは違うというような反応を見せるミコット。

「イエソドの銃はもっと大振りです。よくそんな大きさを魔力制御機構が入られますね。玩具みたいですよ」

「そんなもん入ってない。何の話だ」

全く話が噛み合わないことに二人揃って首を傾げる。

「魔力制御なしでどうやって弾を作るんですか？」

「作る？弾は込めるもんだろ」

更に大きく首を傾げる二人。

「え？ああ、なるほど。小型化のために弾だけ別に生成してるんですね。でもそれって効率悪くないですか？」

「話が噛み合っていないな。言っておくが魔術はないんだぞ」

「あつ」

「忘れてたな」

前提事項を忘れて話していれば話が噛み合わないのも当然だ。迂闊な言動にミコットが顔を少し赤くする。

「でも、それじゃあどうやって弾を飛ばすんですか」

「弾は基本的に鉛の弾芯に銅の被甲をかぶせたもので出来ている。」

それを火薬を用いて飛ばす感じだな」

「ぷっ」

タヴが簡単に説明すると我慢できなかったのか、何故かミコットが吹き出す。

「こら、何笑ってる。感じ悪いな」

「いえ、済みません。でも火薬って、そんな前時代的、いえ古代文明レベルの代物使ってるなんて」

酷い言いようにタヴが顔をしかめるが、ミコットの発言が事実だとすればタヴにとっては大事だ。

「よし、脳天に風穴開けてやるからこっち向け」

取り敢えず目の前の少女で実験、もとい憂晴らしをしてやろうかと提案する。

「そんなのじゃ無理ですよ。使い物になりませんって」

別に構わないですよと言わんばかりに額を突き出すミコット。よほど防ぐ自身があるようだ。

「使い物にならないって、魔術絡みか？」

うんざりした様子で聞き返すタヴ。

「はい、高速で飛んでくる金属の塊ぐらいなら防げるんですよ。割と簡単に」

「冗談だろ、どうやって防ぐんだ？」

「魔術障壁、といっても判りませんよね。ある程度魔術を修めていれば、魔力で作った物理干渉できる丈夫な膜を作ることができるんです」

「それで防ぐ訳か」

「はい、火薬式の銃が開発された時には既に魔術の基礎理論が出来上がってたので。検証した結果殆ど防御を貫くことはできなかったんです。命中精度も悪かったりコストもかかったりで、そのまま歴史の中に消えていったそうですよ」

とんでもない話だがミコットにとっては常識のようだ。せっかく回収した装備が無駄になってしまったとタヴは更に肩を落とす。

「でも、銃はあるんだろ」

「魔力式の銃であって火薬式のものでないんです。魔力で弾となる魔力球を精製してそのまま射出できる武器を総称して銃と呼びます。作成した会社の名前をとってケルブとも呼ばれていますね。騎士団でも制式採用されています」

「…何でもありだな」

「普及してますけど牽制目的で使われることが多いです。戦闘用の術を修めた術者なら、遠距離攻撃用の術も持ってますしね。遠距離戦が苦手な術者の補助具としても重宝します」

魔力というエネルギーが続く限り撃ち続けられる拳銃と考えればいい。弾を装弾するスキもいらず、弾のコストも使用者でまかなえる。威力がどの程度のものかは不明だが、銃の代替品として使えると考えれば弱くはないだろう。火薬式の銃が廃れるのもうなずける。この情報はタヴの頭を痛くする。ミコット曰く通常の銃弾そのものが効かないということなのだから。銃弾を防げる盾を簡単に作れるのであれば確かに用をなさないだろうとタヴも考える。

「ミコットもその魔術障壁というのを使えるのか？」

「使えますよ」

「ちよっと試してみるか」

そう言ってタヴはミコットに適当的な用意してもらおうように頼んだ。流石に少女の頭で実験はしない。ミコットが一時部屋を出ている間に簡単に銃の点検と装弾を済ませてしまう。今の状況で無駄弾を使うのは好ましくないが、いざ実戦となって効きませんでしたでは済まない。用意をしているとギィイという嫌な音をたてて扉が開く。ノックをしなかったのは手が塞がっていたためか、それともタヴに対して遠慮しない程度には打ち解けたのか。

「これでいいですかね」

そう言って差し出されたのは見覚えのある品、先程使っていたミコット愛用のティーセットだ。

「お前絶対舐めてるだろう」

どうやら絶対に割らせない自身があるらしい。自らのお気に入りティーセットを持ってくる辺り自信の程をうかがえる。

「ふふふ、火薬式の銃なんかで私の障壁を突破できる訳ないじゃないですか」

「何かキャラ変わってないか？」

などと言いながらも最初に的として差し出されたのは安っぽい透明なグラスであった。ミコットはそれを机の上に設置する。

「おい、そっちのティーカップじゃないのか」

「練習です！練習！もしもってこともありますし」

そんなに警戒するなら最初から持っただけなればいいのにといいながらも、タヴは狙いをつけて発砲する。すると銃声と共にグラスが飛び散った。

「きゃっ、って何するんですか！まだ障壁張ってませんよ！」

「いやいや、すまん。手が滑った。次を頼む」

そう言って視線はきつちりとミコットの持ってきたティーセットに向ける。

「ふっ、判ってましたよ。タヴさんがそういう人だって」

「いいから、そのお気に入りティーカップをだな」

「甘いですよ！今回ばかりは私の方が上手です！」

そう言って更に二つの安物グラスを取り出した。本当に最初からグラスだけ出していいものかと思いつつ、今度はきつちり障壁を張るまで待つ。あと二回同じことを繰り返してもいいが、さすがに弾の無駄であろう。

「いいですよ。ドンと来いですとも！」

「そんな意気込んでも」

ミコットが魔術障壁を展開するのにはほとんど時間がかからなかった。ミコットの實力が如何程のものか知れないが、この速さで対応されては堪ったものではない。

「じゃあ撃つぞ」

タヴはキャッチボールをするような気軽さで声を掛け引き金を引く。パンツと短い音を立てて発射された銃弾は一直線にグラスへと進んだ。このまま一直線に突き進むかと思われたが、その直前で変化が起きる。グラスの10cm手前、ちょうど障壁を張った位置で失速、まるで何かに絡め取られるように進んでいく。そのまま自然に軌道がそれ、グラスの縁をかすめるようにして銃弾が床に落ちた。完全に失速して落ちたのだ。貫いたというよりは引っ張ったといった方が近いだろう。と解説しても当の二人に視認できるものでもないのだが。

「これは抜けたのか？」

「…そんな。私の障壁を抜いた？」

両者とも判断し兼ねているが、ミコットの顔は深刻そうだ。

「ミコット、これはどうなったんだ？ グラスはかすめたが完全に抜けたって感じでは無いよな」

落ちた銃弾を拾いながらタヴはミコットに意見を求める。拾った銃弾の弾頭は潰れていない。何ともは判断しにくい状況だ。

「信じられませんが弾は届きました。障壁自体は破れていません。弾の刺さった部分だけ伸びたって感じですね。戦いの都合上、対魔術用に特化しすぎていたかもしれません。物理的な衝撃がこれだけ一点に加わることを想定していない術式、盲点でした」

弾が届いたのがそんなにも信じられないのか神妙な面持ちで分析するミコット。

「一応聞いておくが、今の魔術障壁はどの程度のものなんだ」

「上の中といったところです。意地悪のつもりでちよつと強めのを使いました。使い手によって強度も変わりますが、私は上位の術師です。…並みの魔術師では防げませんね」

どうやら使い物にはなりそうだとひと安心するタヴ。ミコットは依然として真面目顔だ。

「これで当面は大丈夫か」

「そう樂觀視しない方がいいです。対策のしようは結構あります」
「例えば？」

「単純に広めに障壁を張れば届く前に失速しますし、多重障壁というのも出来ます。私が使ったものより上位の障壁や特殊な性質を持った壁を作る術者もいますから確実性はないです。まあ、それは魔術にも言えますから条件は同じですか」

タヴはなるほどと呟きながらヒビの入っていたグラスを手にとった。確かに届いたようだが狙いはそれている。威力もかなり削ぎ取られた。

「ことごとく便利だな。魔術というのは」

「教えましょうか？多分使えますよ」

その言葉にタヴは少し黙って考える。そして、

「いや、いい。遠慮しておこう」

以外にも拒絶の返答をする。普通なら使ってみたいと思うのだろうがタヴはそうではなかった。

「どうしてですか？そんなに大変じゃないですよ」

「今から学んだとして、それなりに使える様に成るかもしれないが、それは所詮付け焼刃だ。本職にはとても敵わないだろう。戦いに併用したところで扱いきれるとも思わない。俺には今まで培ってきた技術があるしな。それで十分だ。足りない部分はミコットや他の誰か得意な奴がやればいい。単純に情報、相手が魔術で何をできるのか、どうやって戦闘に使うのかを学ぶ必要はあるが、自分で使えるようになる必要性は感じない」

都合良く力が手に入ったとして、安定して使える保証もない。必要ときに必要な分だけ活用できなければ技術や兵器に何の意味もないのだ。いきなり魔術など学んでもその域に達することはできないだろう。余計な混乱を招くだけと、タヴは敢えて魔術の習得を断った。

タヴは自分ができていることをよく知っている。背伸びはしない。自分にできることを確実にこなすことが仕事の達成につながることを誰よりもよく学んできた。云うなればそれこそが自分の最大の武器だと自覚している。

「タヴさんがそう言うならいいですけど。気がむいたら言うてください。教えますから」

「時間があつたら頼む。もつとも、そんな時間はないだろうがな」
「余計な仕事が増えるから遠慮、とかじゃないですよね」

実は半分当たっていると感じながらもミコットには気づかれないように真面目な顔で返す。

「そんな訳ないだろ、出来ることは多いに越したことはないんだ。今はそうしている時間が惜しい。そうだろ」

「真面目に最もらしいことを言われると嘘臭く聞こえるのはタヴさ

んだからでしょうか」

「そんな目でみるな！」

実際、銃が調達できなければ、銃が使い物にならないければ、タヴは直ぐにでも魔術を身に付ける必要があったかもしれない。しかし、それは余りにも無謀なことであった。身に付けることが無謀なのではない。それを使って戦わなければならなくなることが無謀なのだ。

スポーツのルールだけ学んでもプロに勝てない。誰にでもわかることだ。ビギナーズラックがあったとしても継続して勝てることはまず有り得ない。同じ土俵で戦おうという発想がそもそも間違っている。仮に身に付けるにしても、状況を確認した後自分に必要なものだけ習得するのが現実的だ。その上で自分の土俵に敵を誘い込む。それがルールのない殺し合いで生き延びる術。魔術師の土俵などでは決して戦ってはいけない。ここが異世界だろうが何だろうがタヴのやることは変わらない。自分にできる方法で効率良く殺す。それだけだ。

「近接は効かないのか？ ナイフは結構得意なんだが」

「そういえばさっき串刺しにされそうになりましたっけ」

頭の上を通り過ぎていったナイフを思い出し嫌な顔をするミコット。

「普通の刃物はあまり効きません。これも障壁で防げます。ただ使用者による魔術付与や刻印の刻まれた武器なら効果的です。魔術師の殆どが使用しますね。というより武器を当てるために魔術の訓練を受ける騎士が多いと言った方がいいでしょうか」

どうやら刃物は調達する必要があるとタヴは心に留めておくことにした。魔術の付加された刃物ならそのまま使うことができる。

「しかし騎士か、俺のいた所では火薬類の発達で一気に衰退したかな、見たこともない」

「騎士がいなくて国が守れるんですか？」

イエソドでは騎士が国防の要である。騎士と云っても甲冑を身に纏った時代錯誤の戦闘集団ではない。剣技を磨き、魔術を習得し、その身を兵器にまで昇華した兵隊だ。

「イエソドの騎士がどんなものか知らないが、国を守るための兵隊はいる。もっとも、騎士のように誇りを持った連中じゃない。国を守るために戦う奴なんて殆どいないしな」

騎士と誇りがイコールでつながるのはタヴのイメージでしかないのだが、イエソドでもその価値観は同一だった。タヴの意見は極端なものだが彼の周りにはそういう人間しかいなかったのも事実。その環境がこの男の性格を大きく歪曲させたのかもしれない。

「じゃあ、何のために戦うんですか？」

戦うための理由、おそらくはミコットにもあるのだろう。根本的な質問だが、その質問が持つ意味は大きい。だから、

「…死にたくないから、かもしれないな」

タヴは当たり前のことしか答えられなかった。その答えは生きるためなら誰でも殺すということ、生きるためなら誰でも見捨てるということ。この男が誰かのために命をかけることは無いだろう。そう、少なくとも今までは…。

第五項

一人の男が森の中を疾走する。小奇麗に身を整えた性格の悪そうな男、タヴだ。足の踏み場もないほど草木が生い茂っているが、履いているショートブーツは軍用の特別性だ。道なき道でも容易に踏み込むことができる。借りたばかりの真新しい勝色のコートに枝傷が付いてしまいが問題ない。所詮は借り物だ。

タヴが召喚された洋館は森の中にひっそりと佇んでいた。一番近くの街道まで南に徒歩3時間ほどの距離がある。目的の街は洋館の東南東、街道に出てから道伝いに更に8時間、街に着くまで約半日を要してしまう。なのでタヴは一度南に抜けるのではなく一直線に街を目指していた。

洋館は王家専用の隠れ家であつたらしい。ミコットによると結果が張られていて通常の者は入れない仕組みになっているとのことだが、タヴにその仕組みは判らない。単に見つけにくくなっていると考えている。その距離は洋館を中心に約1km程だ。かなりの広さになる。そしてその1kmのラインを超えた時に異変があつた。

少ない人数ながらも視線を感じたのだ。こんな森の中だというのに、まるで獲物を待ち構えていたかのように気配が近づいてくる。どうやら隠れ家の大まかな場所はバレていたらしい。タヴの嫌な感が当たったのだ。敵をわざわざ洋館に呼び込む必要はないので戻ることとはしなかった。かと言って交戦するつもりもない。今は街に行き薬を手に入れるのが先決と逃げの一手をとっている。

追いにくいように障害物の多そうな経路を通って疾走するタヴ、かれこれ三時間走っているが速度が落ちる気配は無い。それどころ

か汗一つ掻いていない。やはりこの男はどこか普通ではないらしい。さすがの追っても諦めたのか既に気配もなくなっている。しかし、タヴは速度を落とそうとはしなかった。このまま街まで駆け抜けるつもりだ。

（…撒いたか。練度が足りんな）

明らかにタヴが異常なだけなのだが、物足りなさげに落胆の表情を浮かべる。この男は一体どんな化け物達を相手にしていたのだろう。

一直線に全力で走れば既に街についているはずなのだが、追手を撒くために多少コースがそれた。今タヴは森を抜け街に向かって街道を南に歩いている。現在地は街の北側だ、どうやら行き過ぎてしまったらしい。街が視認できる距離でなければそのまま北に進んでいたかもしれない。道はしっかりと舗装されており道幅は割と広い、片側で人が三人横に並んで歩ける程度の幅だ。車道もある。まばらではあるが車らしきものの往来もある。

街には直ぐに入ることができた、というより明確な堺はない。街道の近くにもまばらではあるが民家は存在していた。街の中心に近づくにつれて建物の密度が上がっていく。街の名はテュケー、メレク王国で三番目に大きい都市だ。こんなにも大勢の人がいる街の近くに陣取って隠れているのだからミコットも大物だ。

「何というか。予想していたのとは大分違うな」

テュケーの街並みはタヴから見てもそれ程違和感の無い普通の街だ。建築物は後期バロック建築に近く芸術性が高いがそれ程過剰な装飾は見られない。タヴはローマで似たような世界遺産を目にしたことがあるなと思いつながら辺を見渡す。

街の入口らしく地図付きの案内板もあれば、音声式の観光案内も設置されている。街中に車の往来はあるが、道は歩道と車道にしっかりと別れているし、信号らしきものも配置され住民は交通ルールに従い歩を進めている。ここが地球の街と言われても信じてしまいう程に自然だ。タヴはせっかくファンタジーな世界と思ったのにと年甲斐もなく落胆していた。実際、ファンタジーというよりも科学技術の代わりに魔術という技術が発展した現代と言う感じだ。文明レベルも変わらなく見える。一概にどちらかが発展しているとかは評価できないだろう。

「さて、現在地はどこだ？」

案内板の前に立ち現在地を確認する。本来なら南側から街に入り指定された店を目指す予定であった。そのための手描きの地図もミコットから預かっている。しかし、今タヴがいるのは街の北側、真逆である。そもそもミコットには一直線に全力疾走する、などとは伝えていない。馬鹿正直に街道に出て歩いている所だと思っているはずだ。菓を手に入れてから洋館に戻るのも二日間の予定で話している。

洋館を出発してからおよそ4時間、予定より7時間も早い。

「真逆の位置だな。街もかなり広いし、時間も大分節約できた：ここは」

タヴの腕が案内板の操作パネルへと伸びる。そこには複数のボタン。スピーカーらしきものも埋め込まれている。

「普通：これしかないだろ」

ポチッと音声案内のボタンを押してめばしい場所のチェックを始めた。あろうことかこの男観光する気満々である。



「…もう、街道に出た頃ですかね」

ミコットは目覚める気配のない主の手を握りながら独り言を呟いていた。洋館を出るための身支度は殆ど終わっている。元々荷物が多い訳でもない。城から逃げてきた時に持っていた物などベルトに下げた護身用のナイフぐらいである。お気に入りのティーセットは元々洋館にあった物だ。気に入った素振りを見せるとセフィリアが気前良くプレゼントしてくれたのだが、持っていくつもりはない。壊してしまう恐れがあるよりはここに置いておいた方が良いという判断だ。

結局は持ち運べる食料と衣類を纏めるだけで身支度は済んだ。ミコットは荷物の少なさに改めて自分たちの置かれた状況を再確認し、追い詰められていることを実感する。

食料は長くても後三日間で底をつく。タヴの判断がなくとも行動を起こさなければならぬ所まで来ていたのだ。ユードも一向に帰ってくる気配はない。いざという時の合流場所も決めているが安否を確認する術はない。セフィリアの状態も芳しくはない。一人で行かせたタヴもマルクトの人間だ。この世界、イエソドでそうそう上手く行動できると思えない。

「大丈夫：ですよね」

寂しそうな表情を浮かべ、瞳はどこか潤んでいる。握る手には思わ
ず力が入り、セフィリアの脈が伝わってくる。その脈は非常に弱々
しい。ミコットは更に不安を募らせていく。

「私が：こんなことじゃ駄目ですね。タヴさんや、ユードさん、セ
フィリア様だってこんなに頑張ってるんです。しっかりしなきゃ！」

パンと両の頬を叩いて気合を入れ直すミコット。断腸の思いで送り
出した男が全力で観光中だとは夢にも思わない。



街の入口で観光コースに目を通したタヴは早速観光モードに移行。
既に幾つかのスポットを周り、手に下げた紙袋の数は5つを超えて
いる。中身は気に入ったお菓子や漬物など、主に食品系のものだ。
目を惹かれる工芸品も多々あったが、拠点のない今の状況では保管
が難しいので泣く泣く諦めることになった。人の金なのでやりたい
放題である。

「うーん。次は何処に行こうかな」

軽く背伸びをして体をほぐし、次の行き先を考える。何処で手に入
れたのか手には観光マップも握られていた。到着しておよそ二時間
程度、短縮した時間の残りは5時間。タヴはその時間の全てを観光
に費やそうと人の気も知らずに決定していた。

「ここらへんで腹に何か入れておくか」

起きた時にミコットから軽食を貰っているとはいえ、それから6、7時間は経過している。普通に考えてお腹が減ってくる頃合だ。タヴとしては食事もある変則的なことが多いので食べなくても問題ないのだが、これから待ち受ける冒険（観光）のためにも万全を期す心づもりだ。

タヴは辺りを少し探索して適当な飲食店を探す。候補はいくつかあったが入ったのはお洒落なカフェテリア。いい年した男が一人で入るには気後れしてしまいそうな店構えだ。無論、タヴにそんな特殊な趣味があるという訳ではない、と思われる。そこを選んだのは単に空いていたからという理由でしかない。

気にせず扉をくぐる。入って見ると店構えとはかなり印象が異なっていた。というか詐欺だった。入ってまず目にしたのは小汚いカウンター席とセルフの水汲み場、そして気の良さそうなオバちゃん。云ってしまえば定食屋かラーメン屋の風貌。お洒落な店構えはどこに行った？

タヴは直ぐ様理解する。何故この店がやたらと空いていたのか、というか客が全くいないのかを。これは巧妙に仕組まれた罠！空腹という抗えぬ衝動に目をつけ、上辺だけ繕われた狩場に誘い込む卑劣な行為！

「まあいいか」

まあ非常につまらないことに、この男には何の関係い。一般市民ならいざしらず、多く戦場を渡り歩いてきた百戦錬磨っぽい傭兵さんに見た目の違いや衛生面の悪さなど無いに等しい。

「驚いたね。普通に入ってくるなんて」

キョトンとした顔を浮かべる定員のオバちゃん。珍しいものでも見るかの様にタヴを観察する。

「客への第一声は、元氣よくいらっしやいませじゃないのか」

そんなオバちゃんに軽口を叩きながらタヴは勝手にカウンター席の中央に腰を下ろす。

「はは、確かに。いらしゃい。あんちゃん面白いね」

「ああ、あんたが思ってる以上に面白い人間だと思うぞ。色々な意味で」

マルクト（異世界）からの来訪者と言えば、それだけで十分に面白い存在だろうが、流石にそれを言うのは冗談が過ぎるので自重する。

「そいつは楽しみだ。で何見せてくれるんだい？」

「見せるのはそっちだろ。こっちは客なんだ。主に腕を見せてくれ」

そりゃそうだ、と店員のオバちゃん。袖をまくって二の腕に力を入れ力瘤を…

「ごめん。思いの外つまらない」

「人の渾身のボケを蔑ろにするとはいい度胸じゃないか」

「訂正、思った通りつまらない」

「私も訂正、思った通りウケなかったわ」

「ふっ、まったく。腕を見せるってんならこれぐらいやってもらわないとな」

よっ、と掛け声を入れタヴは袖をまくる。二の腕に力を入れ力瘤を……左腕だった。

基本事項としてタヴの左腕は本人のものではない。あまりに自然に使えていたので本人も忘れていた。袖をまくっても出てくるのは女の細腕でしかない。とはいえかなり鍛えられた部類の腕ではあるのを見せて恥ずかしものでもない。それがタヴのようない年をした男性でなければの話だが。

「ぷっ、ハハハッ。何だいそのほっそい腕は。女みたいじゃないか」

案の定笑われた。ええ、事実女のものですよと、心の中でタヴは呟く。だがこのままで終わるような男ではない。予期せぬ逆境を咄嗟に乗り越えられてこそ、真の活路が見出されるというもの。そしてタヴは直ぐ様行動を起こす。

無駄に洗練された動きで着ていたコートを無駄に勢い良く脱ぎオバちゃんの視界を一瞬遮る。その隙にまくった左腕の袖を素早く直し、代わりに右腕を出す。更に舞っていたコートを肩でキャッチして肩接合部分を隠した上で上体を捻り不自然にならないように左腕を見せていた位置に右腕を置換する。幸い、オバちゃんに対して体を真横に向けた状態で左腕を出していたのでそれ程不自然ではない。

一瞬にして細い綺麗な腕が引き締まった筋肉質な腕に、古傷のおまけ付きだ。

無論、このまま静止していれば直ぐに気づかれる。そこでタヴは右腕にこれでもかと力をいれて目にわかるほど筋肉を膨張させる。腕の変貌を印象付けるためだ。そのまま回転するように背を向け、立

ち上がりながらコートを着直す。その間わずか2秒。腕の接合部を確認させる暇は与えない。

「と、あま、これぐらいやってもらわないとな」

等と言いながら、タヴはすかした横顔でオバちゃんを見る。どこか勝ち誇った風に見えるその表情だが、その実、心中穏やかではなかった。やってみたものの完成度は低い。大袈裟なフリと視認時間を制限することで体裁は整えたが、多少観察力のある人物なら騙されることはない。

（さあ！どう出る！）

「おお！大したもんだね！」

どうやら上手く騙されてくれた様子だと、タヴはホッと胸を撫で下ろす。しかし、

「左右で腕の肉付きがこんなに違う人間初めて見たよ」

しれっとタネでも何でもないタネ明かしをされてしまった。

「いや、そこはわからない振りしところよ」

あっさりバレてしまったタヴは別段悄気することもなく対応する。立ったついでだと水を汲みそのまま元の席へと腰を下ろした。

「いやいや、十分だよ。今みたいな会話に付き合ってくれる客はそういないもんさね」

「そう言われると俺も体を張った甲斐があるというもんだ。即席とし

ては合格点を頂けるレベルだったか」

「まあ、ギリギリ合格だね」

「手厳しい」

評価基準がオバちゃんの裁量次第なのでなんとも言えないが、普通に気に入られたようだ。

「合格祝に好きなもん一つ奢ってやるよ。付き合ってくた礼だ」

「じゃあ、この店で一番高い酒で」

「いい性格してるじゃないか」

思いの外上機嫌なオバちゃん、文句を言いながらも拒否はしない。本当に酒を奢ってくれるらしい。日の高いうちから酒盛りは如何なものかとも思うが、この男であればどうせ水と変わらないのだろう。

「しかし、常連か別口の客以外は久しぶりだよ。初見の奴はあんたみたいな観光客が間違って入ってくるぐらいだからね」

酒の用意をしながら会話を続けるオバちゃん。どうやら全く客が来ないという訳でもないらしい。

「カモられた訳か」

「金に見合った物を出すさ、隠れた名店みたいなもんさ」

「自分で名店言うなよ、オバちゃ」

スコンッ

言い終わる前にタヴの顔スレスレに何かが飛来した。ハラハラと何本か髪の毛も舞っている。ゆっくりとタヴが後ろを見ると、そこには明らかに調理用ではないナイフらしきものが突き刺さっていた。

「おやおや、何だって？よく聞こえなかったんだけど、もう一度行ってくれるかな？」

酒の用意を止め、非常に威圧的な和かな表情でタヴを見据える。明らかに典型的なアレである。年が気になるお年頃だ。普通ならこの流れは決まりきったモノになっていただろう。実際、このオバちゃんは何度も似た遣り取りを行なった経験がある。言わば様式美。曲がることのない不文律。しかし、今回の相手はその程ではなかった。

「ふっ、甘いな。普通ならその威圧的な態度に当てられて訂正するのだろうが、俺の意思はそんなに弱くはない！」

タヴは彼としては意外でもなんでもないが、一般的には意外な反抗的な態度を示す。

「∴その反応は初めてだね」

当然オバちゃんにとっても予想外の展開だ。こんなくだらないことで譲らない男はそうは居まい。

「これからあんたにとっての禁句を言うと思うが、まずそこは流せ。確かに俺はオバちゃんと言おうとした。しかし、これはあくまで名と年齢が分からない年上の女性を呼ぶための親しみを込めた総称でしかない」

タヴは躊躇うことなくオバちゃんと言い放つ。更にはそれを正当化しようと独自の考えを展開していく。分かっているながらも本人の前で禁句を言いのけるその胆力は驚嘆に価する。

「それでも言葉のニュアンス的に年がいつているイメージがあるじゃないか」

冷静に見据える様に返すオバちゃん。この御人もそれなりの修羅場をくぐり抜けているのかもしれない。そう思わせるはどの圧が滲み出ている。目の前の男が単なる身の程知らずの馬鹿なのか、それとも行き着くところまで行った馬鹿なのかを見極めようとしている。

「確かに言わんとしていることは解る。だが、俺はオバさんではなくオバちゃんと言ったんだ。ニュアンスで言うなら『さん』と『ちゃん』では年齢に対するイメージが大分違うだろう。お嬢さんとお嬢ちゃんではどちらが若いかわわずもがな。それだけでも既にかなり気を使って発言しているんだ」

何とも細かい指摘だが間違っていない。小さい部分から切り崩しにかかる気か。

「ならお姉さんでいいじゃないか」

そんな瑣末なことはどうでもいいと言わんばかりの直球。この台詞はある意味自分で言うこと自体タブーでもあるのだが、今回はその程ではない。相手が既にオバ以外の名称を説明に使っている時点で使用は容認されたものとみなして差し支えない。

「お姉さんとオバちゃんでは、前者の方が若い印象だ。それは否定しない。年上を呼ぶのにも相応しい。しかし、考えてみてくれ、姉と言えば傍系血族の2親等、対して叔母は3親等だ。親しく呼ぶためとはいえ、それ程までに近い族柄を用いるのは些か礼儀に反する、そうは思わないか？」

それらしく法律的な観念を入れてくるタヴ。実際そんなことはどうでもいいことだ。この男の口先だけの戯言でしかない。おそらくこの男は深く考えてしゃべってはいない。

「うう、何だか正しいことを言われている気がするきたわ。けど、オバちゃんと言われるのには抵抗が…」

果たしてイエソドに親等の概念があるのかは謎だが、何故か納得してしまいそうなオバちゃん。イエソドでは血筋の距離が意外に重要なかもしれないと、ふとタヴは考える。

「そう、そもそもその根拠の無い抵抗心が問題なんだ。年をとっている思ってしまったているのは他ならぬ自分自身。むしろ周りの人間は年相応よりも若く見える相手に対して敬意をもってオバちゃんという言葉を使っているというのに、その好意を蔑ろにってしまったていることにならぬはないか！」

最後に価値観に訴えるタヴ。君は若いんだ。他者からは若く見えているんだ。だから気にすることは無い。自分と周りのありのままを受け止めなさいと、上辺だけで口走る。

「まさか私が言いくるめられるとはね」

頼まれていた酒を差し出すオバちゃん。本当にタヴの言葉に感化されたのか、それとも面倒になったのかは解らないが、オバちゃんは納得してくれたようだ。

「それじゃあ！」

タヴは説得に応えてくれた好敵手に感嘆の気持ちを込めて確認を促す。

「ああ、呼んでくれて構わないよ。気高く、雄々しく、何時までも若々しいこの私に敬意を持ってその愛称で呼んでくれて構わない」

そこまでは言っていない。もはや誰も正しくない中で身勝手な想像が各自構築されている。

「いや、俺たちの間柄はもうその程度のもんじゃない。俺が悪かったところもある」

「そうかい。私はこのままでもいいんだがね」

激しい戦いを終えて距離が縮まったということ、それが示すのは、すなはち：オバと姉の差か、否：

「それでは俺の気がおさまらない。あんたとの距離は一步以上近づいた気がするしな。話は変わるが接頭語の御おんというのは尊敬や丁寧を表すために使う」

「何だい急に」

いきなりの話題展開に不穏な空気が流れる。

「距離の近づいた俺たちの間ならもうそんな気遣いはいらな**い**と思っ**て**な」

不穏な空気に合せ、何時の間にか暗雲が立ち込める。言わなくていいと言うのに、言うべきではないと言うのに、この男はそれができない。いや、分か**っ**ていてそう**し**ない。ここまで持**っ**てくるために無駄な話を展開したのだ。落とさなくてはなるまい。そして男は口

を開く、自ら朽ちゆく定めだとしても。笑顔のままで、ただ思ったことを口にする。

「遠慮なく呼ばせてもらおうとするよ。ばっちゃん…ぶっ！」

暗雲より飛来せし鉄槌は、迷うことなく、行き着くところまで行き着いた単なる身の程知らずの馬鹿を貫いた。

一応言っておくと、オバの才は御ではない叔だ。オバちゃんという呼び方の才も別に丁寧に言っている訳ではない。そういう単語だ。省く必要などないし省けない。悪戯な悪意による嫌がらせでしかない。結局、敬語は常に使っておいたほうが無難なのだ。



喧騒とする街の中、一人の女性が闊歩する。フード付きのコートと野暮ったい縁太の眼鏡で顔を隠しているが、どこことなく気品が感じられる女性。モデルのような整った体型は服の上からでもしっかりと確認することができ、背も高い。ヒールのついたサンダルを履いていることもあり、あまり並んで歩きたくない背格好である。隠した顔とは裏腹に服装はお洒落なものだ。胸元の大きく空いたキャミソールに七部丈のホットパンツ。コートを脱いでしまえばかなりの露出度になるだろう。

そんな女性が声もかけられずに一人で歩いているのは、顔を隠していることもあるだろうが、どこか近寄りがたい雰囲気を出しているからだ。悪い意味ではない。いい意味で触れてはならないような清純なイメージ、それが女性から人を遠ざけていた。

女性にとってそれは好都合でもあった。何せ顔を隠して出歩かなくてはいけないような立場の人間だ。人が寄って来ないのはありがたい。それでも、人と関わらないということは不可能である。ずっと一人であれば人恋しくもなる。出来れば多少人が居て、それでいて過度に干渉してこないような所がほしい。

そんな都合のいい場所を求め数刻。観光も兼ねていたので時間は無駄になってはいない。しかし、さすがに一人で彷徨うのは限界だ。それでなくとも小休止は必要。だというのにこの時間帯、飲食店など何処も混みあっている。一息つける場所などあるのだろうか。

いや、そんな都合のいい場所はあるまい。そう諦めたその時、その場所は現れた。人の気配が全くないお洒落な店構えのカフェテリア。何故この時間帯に人がいないのだろうか？定休日？それとも予約制？そんなことを考えつつも、女性は扉のノブに手を伸ばす。あるいは彼女が万全の体調であれば、開く前に違和感を感じ取れていたかもしれない。しかし、今の彼女は疲れと空腹に占められており、冷静な判断などできなかった。

開かれる扉、それは異なる世界への扉。

異世界とは何も突拍子もない現象でのみ遭遇するものではない。身近に現れるほんの些細な異質な空間であっても、それは時として十二分に異世界として機能する。

目の前に広がるのは今まで見たことのない光景…

汚らしいカウンターに不均一に並んだ椅子、壁は所々ヒビ割れ、すす汚れている。空気も悪い、何の臭いだかも判別できない嫌な粒子

の渦が立ち込めているのが感覚で理解できる。とても人が飲食をする場所ではない。生活をできるような場所ではない。少なくとも女性にはそう見えた。

今いるのは世界の境界線、女性は本能の赴くまま踵返してその場を離れようとした。だが、体がまったく動かない。気持ちだけが先に行く。そこには鬼がいた、人の形をした鬼。どう見ても悪鬼羅刹の類。扉を開けた瞬間、その姿を認識すると同時に体を奪われたような錯覚に陥っていた。そして、そのことにすら体を動かそうとするまで気づかなかった。

鬼はゆっくりと女性の方へと顔を向ける。よく見ればその手の先には一人の男が倒れていた。鬼の手には銀色に輝くお盆、薄く赤色に染まっている。

何時の間にか鬼はすぐ横にいた。手には依然として赤い盆。次は自分か、そう思った瞬間、鬼の手が肩に伸びる。

「…イラッシャイ…」

耳元で優しく囁かれた高い声。それと共にガタンと扉が閉まる。女性は何時の間にか境界を超えていた。そこは女性の知らない世界。こうして彼女は異世界へと足を踏み入れた。異世界とはなにも空間の違いだけから決定するものではない。取り巻く環境ひとつであってもそれは異世界となりうるのだ。



洋館の一室。召喚の儀式が行われた部屋。そこに設置した五つの赤い宝石が淡く輝き暗い部屋を照らし出している。ちょうど五芒星の頂点になる位置に置かれた宝石は他の宝石同士とパスをつなぎ魔方陣を形作っている。タヴが洋館を後にして5時間。順当に進んでいれば道のりの半分を過ぎた辺りかもしれない。そんなことを考えながらミコットはその魔方陣の中心に目を瞑り佇んでいた。

五芒星のライン上、パスの重なった部分。頂点同士を結んだ対角線の交点にはナイフが突き立てられている。その数は五本。全てタヴが出かけ際に置いていったものだ。

ミコットが目を見開くと同時に五つの宝石が弾け飛び炎の柱が現れる。ナイフの刺さった位置だ。炎柱に包まれる五本のナイフ。そのまま溶けて無くなってしまいそうなほど炎は荒々しい。

ミコットが右手を頭の上に掲げ、パチンと指を鳴らすと炎は何事もなかったかのように消え去った。突き立てられていたナイフは溶けてはいない。だが、変化はあった。ミコットはその内の一本を手に取りるとまじまじと刀身を見つめる。

「成功です！」

とても無邪気な顔をして喜ぶミコット。刀身はまるで日の光を纏ったかの様に赤く染まっている。ミコットが行なっていたのは物質への属性付与だ。単純な魔力付与より高度で扱える術者も少ない。魔術を聞きかじったことのある者なら、この行為だけでミコットがただの術者出ないことに気がつくだろう。一時的でなく半永続的な属性付与を行える術者は非常に希少だ。

「きつとびっくりしますね」

渡した時のタヴの顔を想像してにやけるミコット。別に頼まれてやっている訳ではない。ミコットなりに考え、今できることをやろうとした結果だ。タヴとの近接戦闘の話を思い出し、少しでも役に立てればと、健気にも慣れない金属への属性付与を試みたのだ。

「これなら、十分に魔術師と戦えます」

出来は思いの外いい。満足できる仕上がりのようなのだ。

「絶対、無事に戻ってきてくださいね」

届かぬと判っていても呟いてしまう心配の言葉。

セフィリアのために一人で動いてくれているタヴを思うと、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

タヴの持ち物を見つめていると、切ない気持ちが溢れてくる。

どうして、見ず知らずの私たちにこんなにも良くしてくれるのだろうと、

どうして、見ず知らずの土地でそんなに強く自分を保っていられるのだろうと、

考えてしまう。

この少女はある意味で純粹すぎた。いらぬ思いを巡らせて、いらぬ苦勞を背負い込む。

そして、そんな少女にまた一つ大きな試練がやって来る。

ピ—————

甲高く鳴り響く音。それは異常を知らせる警報音。

「敵襲！」

咄嗟に声に出すミコット。しかし、その言葉に答えてくれるものはいない。こうして、主人を守るための一人っきりの戦いが幕を開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2527y/>

Blue point

2011年11月17日17時42分発行